

昨年の史學考古學地理學界

史 學 界

史學一般 「改訂増補史學研究法」(坪井九馬三)の原
版が邦文史學研究法の權威たるは贅言を要しないが、昨
年更に改訂増補面目を一新して出版されたことは學界の
ために慶賀すべきである。「歐米觀察過去より現代へ」(三浦周
行)は著者が前年歐米を視察したときの見聞を収めたも
ので、「歐米の史風」「史學研究室」(其の他十三篇、いづれ
も史學の學徒に感興を惹かしめる題目を捉へ、著者一流
の精緻な調査と剴切な觀察に基づいて居つて興味深い述
作である。雜誌に見えた論文のうちでは先づ「現代の歴
史觀」(平泉澄、太陽)は、歴史研究の方法を自然科学同様
とする事の可否を論じ純粹客觀の歴史のあり得ない事を
説き史實は題目によつてそれ／＼選擇を要する、その選
擇は價值に關係せしめねばならぬとしてゐる。「ラスクに

於ける歴史認識の問題」(田代秀徳、哲學雜誌)はカント
やフイヒテの歴史哲學が西南學派のそれに如何なる影響
あるかを見、更にラスクミリツカートやヴェインデルバン
ドの説を比較考慮してラスクの歴史認識の特徴は二元論
的なるにあるとしてゐる。「マルクス思惟類型の史的生成
とその理念的内容」(山田秀男、國家學會雜誌)はマックス
アドラーのマルクス論によつたものであるがマルクスが
社會變動の歴史叙述に經驗的實證的客觀性を附與せんこ
した過程即ちマルクスがヘーゲル哲學の影響をうけなが
ら獨自の史觀に到達した道程を説いてゐる。「ランケの史
學」彼の體驗したる革命との關係」(坂口昂、史學雜誌)
はランケの史學そのものに互らさずして彼が歴史家として
立ち彼の史學を大成した境遇態度を詳述したものであつ
て彼は生涯の間四回の革命に遭遇しそのために境遇も變

動しその政見が採用され實際政治にも關係しなければならなかつたが彼は終始歴史家たる立場を失はず彼の史學は時事の實行に深入りせぬことによつて保持されたことしてゐる。リツターのランケ論（小林孤村、國學院雜誌）

はランケの歴史敘述に於ては三つの文化範圍即ち宗教、宗教ニ關聯してその輪廓を指示する哲學的人生觀、國家の發展ニ關係して追想さるべき政治原則を重要素とすこと説き更にランケの常用したイデー、理想、神的なきの語句に就いて簡明な説明を試みてゐる。民族概念構成の根基（塚本毅、國家學會雜誌）は民族概念の對象は民族生活であり凡ゆる民族生活は傳統を中心として統一せられるのが他の文化生活ニ區別する標準であつて従つて民族概念構成の根基は傳統にあること凡ての民族問題はこの根基に還元して考ふるをうるものと説いてゐる（菅原）

國史 昨年の國史界に於て最も大なる事件は、長慶天皇の在位が確認せられて我が皇統譜に御加列につた事である。それに就ての論著は漸く國史界を賑はしたが、この事は寧ろ次の年に於て纏めて記述した方が適當であらうと思

ふ。それに次いでやはり舊版の複製、古書の版行といふ事が目につく。同時に、その機運に誘はれてある個人の論著を一篇に纏めて發行する事、並びに舊著の新に上梓されたものも多い。「國史國文の研究」（和田英松）「日本近世史説」（花見朝巳）「南國史話」（川島元治郎）「西南文運史論」（武藤長平）等はその一例であり、「大日本人地辭書」の新刊「大日本時代史」「日本貨幣史」「國書解題」「本居宣長全集」「傳教大師全集」の覆刻の如きもまたその部類に屬すべきであらう。而してこゝに注意すべきは從來あまりに前方のみを眺めて居つた我國民の眼が昨年來著しく過去に向つて注がる、事となり、先づ自己の研究を第一とする思想が澎湃として漲つた事である。此點より日本史そのもの、研究は可なり賑かであつて、就中幕末維新及び明治史の回顧はあらゆる方面に於て試みられ、それと並行して我國文學の檢討の盛行したのは特記に値し、その方面に於ての相當の收穫があつた。

一。般史方面に於ては綜合日本史大系の刊行が企てられ既にその「奈良朝」（西岡虎之助）「平安朝下」（櫻井秀）が發

行されたが又「綜合日本史概説」(栗田元次)の上巻も現はれた。日本歴史地理學會は「日本兵制史」を編纂したが、就中「兵力中心の移動から見た兵制の六變」(三浦周行)、「久米部と佐伯部」(喜田貞吉)、「平安朝の寺院と僧兵」(竹岡勝也)、「室町時代の解體期と足輕の研究」(花見朔己)、「維新前後の農兵」(藤井甚太郎)等大に觀るべきものがあつた。

それに關係したものに「騎兵制の發達と武士」(西岡虎之助、史學雜誌)に於て大寶令の軍團制が廢止せられてこれに代つた健兒は騎兵制であつたが騎馬し得る階級は良家に限られたから中央に於ける彼等は漸次素質に缺陷を生じて終に有名無實のものとなり地方に於ける良家出身の騎兵が地方政治の紊亂の結果頻發した兵事警察事件に關與し地方の治安は彼等の力によつて保たれ、それがやがて地方の武士となつたこと云つて居るは「平安朝季世の特色」(櫻井秀、歴史と地理)として、政權が絶えず下方に向つて推移した事や此時代に目立つて金力が上下を誘惑した事、美しきものに對する憧憬の念の強く殊に公卿の生活が可なり遊戯的氣分に富んだものである事を言つ

て居るのと同通する何者かある事に氣附くであらう、更に時代が降つて「吉野朝時代洛中に於ける公家の有様」(魚澄惣五郎、同誌)を見て久しきに亙る騷擾のためには所領は押領され邸宅は燬かれた中にありながら駑蕩たる春の日もあつて和歌の會は行はれ學問する日も續いたが、彼等の生活は實際政治に觸れる事が少くて遊戯的であり時世に對して絶望的悲觀を感じたものであるものがある。而してそれについては足利義滿に僭上の振舞多く妻を後小松天皇の准母とし其子義嗣を親王に、自らは太上天皇たらんこしたがその誘因は女系ではあるけれども自己が血統上順徳天皇の曾孫である聖通の孫であつたから皇胤であるとする考に立脚して居ると説いた「足利義滿皇胤説」(渡邊世祐、史學雜誌)と「足利義政の政治と女性」(三浦周行、史林)に於て三麗の一人と言はれた今參局と義政の生母重子との間に尾張國守護代織田氏兄弟の交迭等の重要な政治問題に絡る葛藤をこき柳營を傾ける迄の勢力を有して居た局が一旦義政夫人富子の生んだ男子を呪咀して死に至らしめたことの嫌疑を受けてか

ら流罪に處せられ且つ直ちに死刑に行はれた事情を述べ、最後に大館持房の行狀記なる周麟の故總州太守源公持房景龍院殿高門常譽禪門行狀及び大乘院の尊尊自筆の寺務方諸廻請に據つて局が義政の妾であつたといふ説を斥け、義政を幼少の頃から視養した女であつた事を明瞭に立證し、且つ呪咀の噂は平素局よからぬ重子の作爲であり、義政がこれを信じて彼女を極刑に處したのは背恩的行爲であらうが久しく求めて漸くに得た男兒の死を悼むあまりの人情美の發露として恕すべき點もあらうと言つたものは共に足利幕府の首腦者の内面的生活を描寫したものである。「關東中心足利時代の研究」(渡邊世祐)は室町幕府と鎌倉との職制上並びに執務上の關係から、滿兼及持氏を中心とした地方の狀況を述べ、兩者の間に存した當初の職制上の缺陷は終に其間に隙を生ぜしめたけれども、思慮周到な輔弼の宿將が双方にあつて幸に八十年の間事なきを得たが持氏に至つて鎌倉府の滅亡に歸した事蹟を細かに説いて居る。更に昨年の我國史界に一特徴たる幕末維新史についていへば幕末より明治に

かけて行はれた政治上社會上の諸改革が我國のあらゆる事物を根本的に改造した丈に波瀾に富み變化極りなきものであつた事が、一般人士の興味を蒐めたのは事實であらう。されば此方面に關する各種の研究は各方面に現はれて來たが、就中「國際法よ」幕末外交物語(尾佐竹猛)は幕末外交談判から我國民が始めて國際法の存在を教へられ識者の間に其研究心の唆られた事より説き始めてそれに關聯した我國の主權者、外交、條約、局外中立、居中調停及び戰爭の諸問題を取扱ひ附録として生麥事件、小栗上野介の遺物、幕末海外使節、甲鐵艦問題と陸奥宗光の五項をも收めて居る。何れも豊富な史料を傾け興味ある挿話を交へて當時の實情を描寫し其間珍貴な多數の寫眞を挿入したものであつて幕末外交の背景としてなくてはならぬ好讀物である。「明治維新史講話」(藤井甚太郎)は先づ幕末時代の諸思想を大觀し、社會の缺陷と社會變化の兆きに乗じて起つた水滸の動搖、南方方面開國の機運並びに米露兩國使節の來朝は社會變革の動因となつたことし、以下幕政方針の一變、薩長二藩の雄飛、王政復古運動等を

細説して明治初期の宗教問題、學制、軍制、幣制及び社會救濟策等にまで言及して其根柢に流るゝ精神を描き出さうとして居る。雜誌中央史壇は其特別號として「暮末明治人物史論」を發行し、木戸孝允、岩倉具視、平山省齋、毛利敬親、勝海舟、西郷吉之助、三條實萬、徳川慶喜、大久保利通、近藤勇以下約三十名の人物論を編輯したのは歴史が如何に人の力によつて作らるゝかを示すに足りようと思ふ。かくて維新の研究は一面に於て明治時代史の研究を導くと共に人物崇拜熱を高めた事も著しい現象であつたがそれらの中で「東京奠都」に關する「考察」(森谷秀亮、史學雜誌)は嘗て岡部精一氏が東京遷都の詔の煥發されて居ない事を理由として東京遷都に非ずして奠都であると言つたのは法文に拘泥した見方であるとして之を反駁し新政府は江戸の地位を看取し創業の際より重要機關を設けて着々新策を遂行し、明治元年及二年の東幸は東京の地によりて永遠の治體を確立せられんことを意志の表示であり元年六月の三條實美が岩倉具視に與へた意見書の如き遷都を明示して居ることを斷じて居る。「西郷隆盛辛未の

建白と廢藩置縣」(妻木忠太、歴史地理)は、あまりに知られて居ない隆盛が岩倉具視に所懐を披瀝した建白書を擧げ就中彼が木戸孝允の主張せる廢藩置縣に反對した事を述べそれは薩藩の事情その地を考慮した結果郡縣制度の實行難並びに種々の患害を招來せん事を考慮したものでそれが終に孝允の熱誠なる説破によりて根本的制度改革の必要を覺悟せしむるに至つたことを記したのはまた維新史の一面を物語つたものであるが、更に降つては同二十四年の大津事變に關して「大津事變の史的回顧」(信夫淳平、國際法外交雜誌)が出でついで「護法の神兒島惟謙」(沼波瓊音)が兇漢の所刑に際して政府當局の干渉威壓を斥け身命を賭して國憲の定むる所に從つて普通刑法を以て之を所罰した彼の勇氣を稱へたものが出でた。それに對して信夫氏の説をや、補正したものに「威仁親王と大津事變」(武田勝藏、中央史壇)があり、親王が逸早く御見舞のための御西下を電奏された事を擧げて、其快刀亂麻を斷つ底の御處置を講ぜられた事を賞揚して居る。

外交方面に於ては「日支交通史」(木宮泰彦)がある。古

代より北宋時代までの關係を詳説し特に遣唐留學生が支那の文化を移植したのみでなく、歸化した唐人・印度人・西域人等がそれ々、故國の文化を將來して我國の美術・思想の發達に寄與した事蹟を重要視して居るのは寧ろ文化史の部類に屬してもよい位である。「中古の港ミ問丸」(三浦周行、史學)は支那の「邸」が寧ろ官營の倉庫として發達したものであるに對して我「津屋」は民營のものとして發達し共に商品を保管して手数料を徴する點は一致するけれども邸では委託販賣の例證がないとして支那の邸を以て我國の津屋の起源とせんとする説を排し、次で津屋ミ問屋ミが頗る近似したものである事を言ひ、問丸は委託販賣の外に旅宿をかね貨物の運送を取扱ひ中には爲替手形をも發行するものがあつたとし、又社寺にはそれ々、專屬の問丸があつて一種の獨占を得たものである事及び巨資を要した爲めに港灣の住民等の中に於て自然優勢な地位を占め其の牛耳を執り其間自ら自治制の發生したる経路を説いたものまた外交による我國文化の刺戟を示したものである。「足利時代の通商貿易」(同人、經

濟論叢)は貿易家の商線が南洋方面にまで擴けられた事ミ無名の港灣が外國貿易のために、頓に聲名を揚げて殷賑を來たした事ミが其特色であるとし、それらの海港に於ては問屋が有する運送販賣權がいよゝ、確保せられるに至り、市民の間に自治體が發達して市民中の富豪が牛耳を執つたが、それミ共にまた領主は樂市樂座の如き例外例を設けて他國他所の商人の入市を歓迎した事を指摘し、下つてまた「横濱及び神戸の開港事情」(同人、同誌)では、初めハリスの要求によつて大阪・堺を開いたが、大阪は京都に近いために外人の居留を許さず、堺を以てそれに充てなければならずハリスが外人遊歩地域として十里四方を要求するに及んで歴代の山陵に近い堺を見合せて、さきに一旦拒絶した兵庫に代へた経路ミ、開港豫定地たる神奈川が東海道の交通路に當るの故を以て内外人間の衝突等の起らん事を恐れて井伊直弼が横濱を之に替へた経路ミを對照檢討したものである。更に他の方面を顧るならば新に東京帝國大學が購入した蒲生氏郷事蹟御祐筆日記抄略によりて「蒲生氏郷の羅馬遣使について」(辻

善之助、史學雜誌)述べ、その中にロルテス(後に山科羅久呂左衛門と改名す)が到る處で鐵砲や大砲で戦功を表はす記事あるを注意し恐らく此本は蒲生家記等を本として架空のロルテス物語を嵌入したものであつて氏郷の羅馬遣使事件も疑ふべきものではないかとしたものや、「宗家文書の中より」(武田勝藏、史林)諸種の珍らしき史料を紹介し、就中嘉靖三十五年十一月初三日(弘治二年)明副使蔣から宗氏に對して倭寇の禁遏を請うた書翰原本の儼存を示し、また豊公朝鮮役關係文書を多數に列擧して居るもの、及び「宗家史料による復號一件」(同人、史學)を述べ、寛永十三年以前の國王號に復するため、さきに白石に敗られた雨森芳洲が寺田一郎兵衛と共に交渉の使者として朝鮮に渡つた事及びこの事件のために宗氏は舊領地肥前國基肆郡齒部村を返附せられたといつて居るのは何れも外交資料として見るこゝが出来ぬ。

次に法制史の方面に目を移すに第一に目立つのは「法制史論集第一卷」(中田薫)である従來著者が諸雜誌で發表したもの以外に新に三つの論文を加へて發行したもの

で、就中「養老律令前後の繼嗣法」に於て支那法を繼受して以來繼嗣選定の順位・手續等を固定したけれども不備缺陷少からざる事、その令制が頼れたる事このために王朝後半には種々の慣習が生じて結局律令以前の固有法が大分復活せられたと言つて中世家督相續法研究の序説を茲に求むべきものとした事や「徳川時代の家督相續法」で武家のみに就てはあるが中世に於ては別個の觀念であつた家名相續と封祿相續が結合してしまつて封祿相續が主で家名相續が従であつたと言つて居るのは共に我國の家族制度の法制史研究の一面である。更に一つの勞作は前年より引續き連載七回に及んだ「新制の研究」(三浦周行、法學論叢)であつて昨年に至つて漸く完了した。先づ新制は後世専ら衣服調度等の過差に流るゝを禁ずる一時的の儉約令を指して言はれるに過ぎないけれども當初にあつては必ずしも此一事に局限せられたものでなく、均しく新制といふも其間自ら變遷あるこゝを指摘し、平安時代新制の宣旨の行はれて後武家法制發生の時期に至る間の第一期では新制は格又は官符に相當するもので、

新立莊園の停止、舉錢利子制限、神人等の不法行爲取締その他結番、祿法等の事にも及んだが、第二期の鎌倉幕府は一方に於て幕府の武家法制の制定があつたけれどもそれと並行して建久二年以來數次の公家法制たる新制の發布のあつたことを挙げ、逐條其内容を検討して、各その先符との關係を見、新しいものに對しての解釋を加へて居るが、就中從來三箇條しか傳つて居なかつた嘉祿の新制を新發見の史料によつて殆んご全部に近き三十三箇條に達せしめた如きは我法制史學上刮目すべき事件であらう。而して新制の時期は鎌倉時代の末期に至りて第三期に入るを以てそれが形式上より大臣に向つて宣下された從來の例を破つて院宣を以てし、單に院の文殿に命じて發布したにすぎず、之を内容より見ても前令の遵守に止つて所謂過差の停止になつた事を例示し、轉じてこの種新制のために武家法時代に於ても公家法の權威を失墜する事なく、幕府またこの公家法の遵行を拒む事能はずして常に新制施行の手續を取り、延いて武家法の中にも收めらるゝ所があつたのみならず武家法の形式及び實質

に影響する所も多かつたを論斷して從來の武家法制研究者が此種公家法を無視した態度を難じたものである。次に「我國最古の法」(牧健一、同誌)を貫ぬく觀念は法の背後に神が在つて社會的規範に對して法としての權威を附與するものは神であるこの思想であるとし、従つて神の代表者である天皇即ち「すめらみこと」の宣言が國法であるこの思想が生じ神祇祭祀の法制が早くより發達したのは當然で、祭神の儀式法が最古の制定法であつたを説きついで「成文法の起源」(同人、同誌)を論じて公法として十七條憲法、私法としては大化元年八月庚子の詔に見ゆる「男女之法」を以て最初のものとし、私法に於ては身分法が當時法律體系中の最も重要な部分として成文法になつた事を指摘し、「倉庫令考」(瀧川政次郎、同誌)は正倉院文書、政事要略、類聚國史等より倉庫令の逸文を蒐集して之を復原し、次で其の令條の存在又は實施を證明したもので、「九條家弘仁格抄の研究」(同人、法學志林)「弘仁王稅式註解」(同人、法學新報)と併せ看るべきである。法制史より見たる日本農民の生活(上)(同人)は大

化改新が圓滑に行はれたのを以前の土地私有の弊害に苦んだ事と大化新政府の勢力が強大であつた、めでであること、次に融通制度、備荒貯蓄制度が農民を却つて苦しめた事を言ひ、出舉米の弊は終に班田制そのものを廢黜せしむるに至つたと言ひ此時代の社會階級を構成したものとミして貴族、卑姓、白丁、雜色、家人、奴婢の六階級を舉げて居る。それと「日本田制史」(横山由清)「日本奴隸史」(阿部弘藏)とを對比すればさすがに争へぬ時代の差を思はしめる。近世に入つては「頼山陽の法律論」(中島玉吉、法學論叢)を彼の通議中の論法律及び論訟獄の二篇によりて考察し、法律は國民性と相俟ち相應するものであることの考から制律を排斥して非法典主義を採り、従つて不文法を喜び裁判の要諦は心服にあつて強析は最大の弊としたこと、太宰春臺及び新宮涼庭の法度を論じた學者の共通的に抱懷せる觀念は治國安民の要道は法を以てするにあれども法は煩瑣碎密なるを非し須らく簡嚴なるべしとせる事と法律の本質を衡平に置かんせざるものある事を論じた「徳川時代の衡平論」(豊浦興七、同誌)とは共に

併せて相互の思想間に差違あると同時に同一の思想あるをも知るべきであつて近世期に於ける法理論の代表的のものである。降つて明治初年の法制について、明治文
化史として「日本陪審史」(尾佐竹猛)は幕末陪審思想の輸入されたことから岩倉大使一行が彼地の陪審裁判を視察し尋で我國に於ても陪審に類した參座の制の設けられた事に及び明治警察
裁判史判史(同人)は明治の初年に於ける警察制度と裁判制度及び其實施の状況を當時の規則や實例を舉げて説明して居る。明治密偵史(宮武外骨)は著者が自負する程記載の事實に確實性は認め難いがそれでも明治初年の警察制度の背景の一面として見るべきであらう。

經濟史方面に於ては二つの中心點が出現した事が昨年の特色の一つであらう、即ち一は財政史であり他は百姓一揆であつたその第一のものに關しては、「日本財政史」(本庄榮治郎)がある。我國の財政を民族社會の財政、郡縣社會の財政、莊園社會の財政、分權的封建社會の財政集權的封建社會の財政と區分して概論したもので此方面の著書の少かつた現状に於て極めて巧みに纏められた點

は新天地の草分けとして歓迎されて然るべきものであらうと思ふが、その一部分とも見るべきものに「徳川幕府の財政について」(同人、經濟論叢) 概観し、初期の潤澤が中期には缺乏となり末期には紊亂となつたがその唯一の眞原因は幕府財政の基礎とした農業が行詰りとなりて終に貨幣經濟の發達に屈服し自己の支配し得ざる階級に財力を仰いだからであるとしたものがある。而して更に之を對照して見るべきものとしては吾人は「江戸時代に於ける諸侯の財政窮乏」(土屋喬雄、社會科學) を舉げねばならぬ。加賀藩、薩藩、仙臺藩の財政を觀察しその窮乏を促進した原因として諸侯の江戸生活の經費膨脹及びその結果年貢米を大阪や江戸に送つて金にかへ終に彼等商人より借錢をなしその利子に追はれた事、幕府の御用・饑饉・水難等を敷へ、商人階級が隠然たる大勢力を抱擁して封建制度の崩壞の時期に達したと言つた事、「徳川時代の貨幣制度」(黒正巖、同誌) を見、この時代に貨幣經濟が發達した原因は經濟生活の安定、金銀の増産、財政の膨脹、交通制度の發達、都市の發生、奢侈の増長

等を舉げ、鑄貨、紙幣の發行、使用、流通を概説し、封建制度がこの貨幣制度のために必然的に崩壞せしめられたと説いた事とは、共に徳川幕府存在の基本たる封建制度の瓦壞を經濟財政方面から叙述したものである。繼つて諸藩の方面に移るに、岡山藩を中心とした「岡山藩の税制」(同人、經濟論叢) がある。先づ岡山藩の財政窮乏をのべ、それを救済するために開墾獎勵、社會法の利殖及び紙幣の濫發を行つた事を舉げ、藩の税制は地租、運上、萬請代、冥加金等によるものであり、税源として漁り得るものは殆んど全部に及び地租は六公四民に達したが他藩よりは苛征であつたとは言へない、而してその窮迫した社會状態を救ひ得たものは蕃山や武元立平の論じた如く武士の歸農在宅の外なかつたが、それは既に本質的には封建社會の崩壞を意味するものであるとし、また「藩札の濫發と農民の疲弊」(同人、同誌) を論じて幣制の紊亂が農民の生活を壓迫した事を述べ紙幣の發行を試みなかつた天領又は諸藩に於てもその影響を受けて苦楚を宵めたと言つて居る。「岡山藩の海上統制」(同人、歴

史(地理)は主として法制上の見地より岡山藩の海上交通史を叙述し、船舶を統制する機關として藩政府の舟手役及び自治のものとして岡山の舟年寄並に浦邊村落の村役人、舟持仲間を説き、海難に關する取締規則、船舶處分に關する規定、船舶に對する賦課及び運賃制を記し、轉じて岡山藩が海運に力を入れた原因は藩全體の經濟上並びに藩政府の財政上已むを得ないものであつたとして藩の政策が海運業者に多大の便宜を與へた事を言つて居る。それらの幕府及諸藩の財政について個人の意見の見るべきものは「山片蟠桃の二つの意見書」(土屋喬雄、國家學會雜誌)がある。「一致共和對策辨」中にさいた明白なマ—カンチリズム類似の思想を述べ、重金思想、輸出獎勵輸入制限政策、自給自足主義、領内産業保護政策を主張して居るのは彼の代表的著述である「夢の代」に言ふ思想は全く反對のものである、これ彼は仙臺藩のみの事について言ひ、此は日本全體を論じた、めであるとし、又「現米御扶持方金代渡之事」中には、米金を貯へ置き、米價を平準し、扶持米取りの士には、米價高き時は米にて渡

し、低き時は金にて渡し、士の貧窮を救ふべしと言ふ獨特の「窮士救濟策」があると言つて幕府及諸藩の財政策が一致しない所に迄時代弱點を見出さうとして居る。第二の百姓一揆に關しては天正十五年宇和島領戸田騒動に初まり明治五年の徴兵一揆まで五十八件の驚くべき數に上つた「伊豫の百姓一揆」(黒正殿、經濟論叢)がある。殆んどこれも武士階級の苛斂に對する不平(庄屋の非違に對する不滿から起つたもので徳川時代の特有とし且つ通用するものである)が伊豫が小藩に分割された事、藩主の交替が頻繁であつた事、往古の群雄の子孫が農民になつて居つた事及び各藩の財政が小規模にして經濟の發展を計る餘地のなかつた事を其要因とし伊豫一揆の特色として頗る發性であつたけれども傳播性が極めて少かつた事であるとし元祿十二年より明治二年に至る百七十年間に連續して十回も起つた「作州の農民騒動」(同人、同誌)は内三回は暴動を實現しなかつたが作州の自然的社會事情たる耕地少く交通不便であつた上に新開地方の移民者中に武士氣質のものが多かつた事を遠因とし支配階級の誅求

に反對せんとした事及び富豪に對する反感を近因とし、積極的な農民騒動は一も所期の目的を達しなかつた事と騒動の處刑が時代を下るにつれて輕くなつた事實を注意し、これらの農民騒動が社會の根本的改造の理想と一一定の社會觀に立脚しての統一の團體運動でなく、その場の苦痛を輕減せんとする絶望的な復讐に止り、それは中央集權的封建制度が龜裂を生じたためではなく、封建制度そのもの、力によつて自ら崩壞の過程を辿り、その制度の缺陷が暴露し始めた時に生ずる社會運動であるを觀じその一特例として、明治元年より二年に亙つて起つた「作州鶴田藩の農民騒動」(同人、歴史と地理)をきき、それが龍野藩に對する不平から起つたものではあるが鶴田藩の支配と化したために農民間に奸策を弄するものが出來、農民自身が鼎立して相抗争するに至り、しかも一人も死刑に處せられなかつた事の如き、支配者の根底が動搖し統制力が微弱となつた事を如實に示して居る、又「羽州庄内農民愁訴騒動」(同人、經濟論叢)は他の百姓騒動とは全然性質を異にし、幕命によりて他に轉封せらるゝ

領主酒井侯を惜しみ、之を引留むるか又は領主と共に移住しようとする動機から團體運動を試みその代表者は死を決して江戸に上り幕府の大官に直訴するに至つたが、願意の届けられざるに及んで更に徒黨を成して鶴岡城下に押寄せんとしたけれども、郡奉行・郷方役人の命には極めて従順で少しも不法の事はなかつた、これに對して幕府の法制は多數が團結して行動する事は目的の如何に拘らず之を嚴禁したものであつたのに何等の處罰もなかつたらしいのみならず轉封命令が撤回されたのは、封建制度の統制力が動搖しつゝあつた證左を見ることし、又別に「領主擁護の農民騒動」(同人、同誌)として元祿五年八月飛騨高山城主金森頼吉の出羽上山への轉封、元祿十一年八月福山藩主水野氏國除の際に起つた例を挙げ、この二例共に幕府統制力の大きなりし時代の事にて農民の歎願は成功しなかつた所以を詳述したものがあつた。而して此方面の最後のものとしては「明治六年筑前竹槍」(石濱知行、社會科學)であらう。その原因は商業資本主義が發展して貧富の懸隔甚しくなり、加之その主義を助長す、

るやうな新政策が亂發され、しかもそれが何れも豫期の如き救済に役立たなかつたから農民は事毎に新政策に反對し舊時代の復活を希うたのであるとして此事件の推移を描いて居る。少しく方面を變じてまた注意された事件は土地の配分に關する慣行であつて、先づ「舊新發田藩の新田政策」土地慣行(小野武夫、史學)に就て記述し藩の行政制度としては新發田城下に會所があつて、その郡奉行が民政を總轄し、在方の大庄屋に對して政令を傳へ其報告をきき、大庄屋は更に其組内の名主又は庄屋に布令を傳達したものである、財政の仕組は新發田藩の如きその封土大部分が水郷なる場合、新田開發が最も重大なる政務であつて、縦九・横八なる特別の檢地法を用ゐて、公簿の面積を實數より狭く計入した、これ新田増加により藩庫の收入も左程窮乏を告げず、隨て檢地丈量も寛大であつた事、新田増加を幕府へ氣兼ねをした、めであらうとし、藩侯溝口氏の開墾政策大に當を得て慶長三年より七十餘年に四百町餘の新田を得た事を指摘し斯様にして得たる新田を支配するために生じた社會經濟

制度たる大地主制度及びその必然の結果として生れ出た小作地支配制度は仲小作制度並に開墾起原に基く永小作制度及び封建的遺制たる繼米制度を解説し轉じて土地制度の缺陷のために例へば永小作權に關するもの、如き紛争が生じた事を言つたものや「長野縣下に於ける地割の慣行」(本庄榮治郎、經濟論叢)が現在に於ても實行されつゝある事を注意し、それは善光寺平の南東部であるとし、その起原は千曲川の汎濫に伴つて土地が顯滅し地味が變化するため堤防を築いた本田高持の間に生じた慣例であらうとし、またその一部である「信州小布施の地割制度」(同人、同誌)の現状を述べ、更に美濃名森村の地割制度(同人、同誌)が明治三十五年頃に起るものである事を擧げて地割制度研究の史料を提供し、また「筑前の地組制度」(伊東尾四郎、歴史地理)に於ても割替制度が行はれた事を記し、それが多く水害村に行はれた事を指摘し、且つ村が窮乏に陥つたために地割組織になつたものもあるとして居るものがある。再び視界を轉ずるこゝ人口問題に關するものがこれに引續いて來るに氣附くで

あらう。先づ古い時代からいへば「奈良朝時代の人口の研究」(澤田吾一、史學雜誌)であつて、天平十九年太政官奏に記せる郷別課口より郷別人口約一千四百人を得、和名抄の郷名に結合して全國人口約五百六十萬を算し京師の人口を加へて五百七十七萬人を得、轉して諸國出舉稻は人口又は課丁に比例的關係を有すこの見解から弘仁六年八月官符中に陸奥の課丁の記載ある事から出發して諸國の弘仁の課丁を算出してそれを奈良朝に溯らしめて五百五十八萬を得、双方より得た結果に基いて五百萬乃至六百萬としたものがあり、時代が降つては「再び豊臣秀吉の戸口調査に就いて」(相田二郎、歴史地理)述べ、秀吉が朝鮮征伐の軍備のために全國的の人口調査を試みた事を説き、多數の男子が出征するために田島の荒廢を來たさないように注意を命じた事及び調査後の人口移動にも細心の注意の拂はれた事を言ひ又「江戸時代初期の戸口調査」(伊東尾四郎、同誌)として小倉藩と熊本藩とで宗教に關係なく寛永九年十年に戸口調査の行はれた事實を報告して居つて學界の注目が漸く近代になつた事をこ

の方向からも見る事が出来る。最後に莊園に關する論者を列舉するに「田莊の研究」(牧健二、社會科學)に於て田莊が既に一種の私有地であつて、皇族・寺院・臣連伴造國造村首等はその領有者であつたこと、部曲の民の土地や贈與された土地の外に無主地の開發等が田莊成立の原因であること後世の莊園に類似した組織が既に中央の權力者が地方に田莊を有した場合に起つて居る事を指摘し、「平安朝時代に於ける莊園の組織」(川上多助、史林)に就て研究を加へ、莊園の管理をなす莊吏には莊主より一定の田地を與ふるを本來とするが、その莊吏は直接土地人民に接するために動もすれば主家の田地を侵食する弊を生ずるためそれを監督し且莊主自ら莊務に關與する煩累を減ずるためのものとして選ぶのが預所となるのであること、また平安朝期の地頭職は、領主職に外ならぬが武家勢力の勃興と共に地頭に新たな意義が生じたのは恐らく下司職に武士を用ゐたものであつたらう、本所は領主領家よりの契約による寄附のものであるけれども寄附者が契約を實行せぬ時にはその土地を支配する事が出來

寄附者の子孫が斷絶すれば寄附に際して保留された權利また本所に歸する事がある、これ元名義上所有權を移したにすぎなかつたものが兩當事者の地位勢力は自ら本所等に有利になつたのであらう、田堵・住人等に就ても説明を與へて居る。更に他の各種の論著を舉げるに「碾磑考」(瀧川政次郎、社會科學)に於て米を春く事は上代の我國には未だ消費行程の仕事であつて精米は商品として市場に現はるゝ事は稀であつたから、これを作り出す碾磑が發達しなかつたのは自然であつて法隆寺及び大安寺の如き大寺院に於てすら奈良朝時代にまだ碾磑を所有して居なかつた、こゝのや「平安朝時代に於ける貨幣の使用及び流通について」(西田直二郎、同誌)論じ奈良朝時代に於て奈良では錢貨は拂渡に用ゐられて居つた、平安朝に於ても、京都附近でこそ貨幣は流通したが地方ではさうでもなかつた事から新鑄錢の發行によつて市場の混亂を來す程でもなかつたらしい、なほ貨幣の流通には貨幣を以てある宗教的な意味を有するものとした思想がその背後にあつた事を言ひ「中世の兵士及び兵士米に就

いて(相田二郎、歴史地理)は中世に於ける兵士が必ずしも軍事を掌るものではなく領主が領民に對して治警上交通上の勞役に服せしむるために課する課役に服する人と言つたのでこの兵士が特に交通上の勞役に服した、めに兵士米は關米と同様の意味のものに變じ兵士米を徵收する關所の存在を肯定し、ついで陸關が單に收入を目的のみにせずして交通の安全を期する爲にも發生し得べきを言ふ、その關所の研究に深い關係を有つたものに、「商事組合として座の起源」(柴謙太郎、史學雜誌)がある、座結合の要件は營業獨占でなく關錢の免除であり座衆は即神人・寄人即ち農民であつて、座の制度が彼等によつて組織立てられた後に、商人の座が出で、それは營業獨占をも目的として居た、こゝのものはみな中世期までの問題であるが更に近世期のは「妙心寺の寺領・領民の負擔」(中川與之助、經濟論叢)を論じ田租は五公五民乃至七公三民であつたから一般の田租より重いが小物成は徵收しなかつたらしいから一般には比較にならぬ、課役のうち幕府の課役は妙心寺に對しては徵發しただけれども直

接その領地には課せられなかつた事を示し、また「西陣の補助業に就て」(本庄榮治郎、同誌)は織屋に對する染屋、練屋、紋屋、箆屋等の補助業者は大凡元祿以前に於ては織屋自らが營んだものであるが、それが分立するに至つては恰も織屋と宗支の如き關係であつた事とし、彼等の中に染屋、箆屋が仲間を構成して居つたと言ひ、「天保の改革の兵庫の商業に及ぼせる影響」(古田良一、歴史と地理)を見て天保十二年十二月の改革令は江戸町中に向つて出されたものであるからその影響した範圍も狭少であるが翌十三年三月の方が大なる影響を全國的に及ぼしたとし、株仲間の禁止によつて新に問屋營業を企てるものが出來、華客先の爭奪が盛になつた事を説き、更に「近世海運史上に於ける兵庫港」(同人、史學雜誌)に於て近世になつて國內海運が發達し殊に西廻航路が發達するにつれ兵庫はその海運に於て重要な地位を占め商港として隆盛になつた事を物語つて居るものがある。「中村」文學に關しては萬葉集について心の花の萬葉號に「人麿の修辭について」(澤瀉久孝)、「小野朝臣老」(橋本進吉)

等の諸論文を收て居る。「奈良朝時代の短歌の發展」(渡邊吉治、國語と國文學)は文化發達史上では大化以後を奈良朝といふべきであつて此時代文學の中心は短歌であること其間を三期に分ち隋唐詩歌の影響、在來の主觀表現の進展其病弊等を論じ此時代短歌の史的觀察を爲し「古今集の題と讀人との關係」(安田喜代門、國學院雜誌)は古今集にいふ題とは歌の出來た時の作者の藝術的環境及び心理の内の著しいものを示した文句であつて題と讀人の明不明は一致せず戀歌には題知らずとするか空虚な題を掲げる方針であつたこと述べ「古今集格調と和歌改革」(同人、同誌)は本集の和歌を讀人知らず、六歌仙、撰者の三に分ち格調と歌數とに依りて和歌の變遷を考へ讀人知らずの歌は六歌仙に先んじ萬葉に接するもので六歌仙時代に新様式は急に歌界に襲來し六歌仙も時流に應じて進んだが撰者は新様式の爲め過去の格調を益々遠ざかる事に不満を感じて歌壇の改革を圖り之を讀人不知以前にかへした、此の革新復古の急先鋒となつた者は貴之であつたこと云ひ「平安時代和歌の展開」(久松潜一、國語と國文

學)は萬葉集の歌が何故古今集の歌になつたか、古今集の考察、古今集の歌が何故鎌倉時代の新古今集を生んだかを主たる着眼點として形式内容の變遷を説き「撰者のなやみ」(三浦周行、藝文)は廿一代集は各時代の國文學の一反映と見られるものであるが同時に其裏面に隠れたる撰者の苦心を見通す事は出来ぬであらう。古歌は大抵前代の集に入つてゐる筈だが中には古人の見及ばぬものもあらう、之れ等を漏れなく拾ひ見別ける事は容易の業ではなく又當代の作者の歌を擇ぶに當つては其の困難は一入であつた。後鳥羽上皇の御軫念定家等の煩悶の狀を述べ定家以後の歌が師範家の獨占になつて素養なき者の讀み難いものになつた事が連歌の擡頭となつた事より新撰寛政波集の撰者宗祇の苦心を述べ併せて入選運動の激烈であつた事情なきを説き「新葉和歌集與書に就て」(中村直勝、歴史地理)は長慶天皇御即位問題の解決に重大な役目を持つ本集の與書につき、八代博士が唯一の典據とされた富岡本の誤寫の事、富岡本よりも寧ろ菅政友氏が南山皇胤譜に引いた本の方が史料として價値があ

るに述べ「第廿二代の勅撰和歌集」(岩橋小彌太、中央史壇)は新續古今以後にも寛正六年に勅撰集編纂の企があり又實行に著手されたが應仁亂が起つた爲に永遠に滅びてしまつたに述べ「足利義尚の和歌撰集」(同人、歴史地理)は彼は歌道に熱心で勅撰集奏請の機會を待たずに大規模に打聞の編纂に著手し第三卷夏の部に及ばんとしたが延徳元年江州に陣歿した爲めに完成しなかつたけれども此事は應仁の大亂で多くの文献が失はれた後の文運に好影響を與へたに相違ない云ひ「明治初年の歌」(佐々木信綱、心の花)は井上文雄勝安房等の歌を擧げて人口に膾炙せる勤王家の歌の外に彰義隊戰爭前後江戸人の不安な心を歌つた作も亦注意に値すに述べてゐる。其他明治文學に關しては早稻田文學特別號に「硯友社の文學運動」(丸岡九華)「帝國文學發刊の前後」(笹川臨風)「歐洲文學の渡來と影響」(高安月郊)等の諸論文を載せてゐる。物語に就ては「源氏物語新論」(小林榮子、同誌)は此物語五十四帖とは古來言ひならはして居るが紫式部は雲隱迄作つたので勾宮と紅梅とは他の人の作、竹川は一

層拙き人の作、字治は可なりな人の作であること述べ、「私が最近に見た秋津島物語」(後藤丹治、藝文)は本朝書籍目錄に記載されてゐるが未だ誰も知らなかつた此の物語が宮内省圖書寮にあつて夫が假名の歴史物語で建保六年頃の著なる事、圖書寮本は缺巻で徳川初期若くは中期の謄寫なる事等を述べ、「口蓮の遺文其他より觀たる平家物語」(同人、同誌)は日蓮の遺文に平家と似た所が所々ある事、六代御前物語の説話乃至文章が平家と密接の關係ある事、山王靈驗繪卷の詞書も平家の願立の一條に類似してゐる事を説き「曾我物語は無稽の小説」(中島堯、史學)は此物語の主人公たる曾我兄弟工藤祐經等此書中の人々の年齢、記事の年月等一も信を置くに足るものなく、此物語は史實を傳へたものとして大に疑があること述べ、「曾我謠曲の原據」(江波瀧、國學院雜誌)は此の謠曲の原據は流布本曾我物語、舞曲、曾我物語原本、曾我傳説等であること推定して居り國語と國文學の軍記物語の特別號には「軍記物の本質」(高木市之助)「軍記物語と擬古物語」(志田養秀)等の諸論文がある。又「長明發心集」(長尾素

枝、國學院雜誌)は坊間行はれる發心集は怪しい書であること云つてゐる。其他「古今集と民謡との關係」(兎山信一、國語と國文學)「日本詩歌に於ける短歌の地位」(同人、同誌)「歌人として家持」(小泉芝三、同誌)「惟然の研究」(鈴木重雅、同誌)「生活派の先覺鬼貫」(西谷勢之助、同誌)等がある。學術の方面では「復古國學の先驅」(清原貞雄、歴史と地理)は復古國學の祖とせられる荷田春滿が出るまで其の先驅となつた者は長流と契沖とであつて此の二人の保護者であつたのは光圀及び水戸學であつたが廣い意味の國學の先驅としては此時代に興つた一種の神道、熊澤蕃山の思想や古典を自由に研究する風潮が起つて來た事も注意すべきであること「賀茂真淵の學問成立」(大石新、國學院雜誌)は真淵の古學を徂徠の古文辭學に由來するこの説を否定し、眞淵の學問は春滿學の發展であることし、次に彼が其の學を發展せしめた原因等に就て述べ「本居宣長の字音研究に現れたる二の主義」(滿田新造、同誌)は彼の皇國至上主義と韻鏡至上主義との二は兩立しない物で爲めに彼の所論に矛盾が生じた事を述べてゐる

る。眞淵については其他にも「賀茂眞淵の古典研究」(大石新、國語と國文學)がある。「東條義門の三語學書の初刊について」(龜田次郎、藝文)は活語雜話、活語指南、玉緒線分の三書の初刊年月の事を述べ、「字音假字用格及詞の玉の緒の刊本につきて」(同人、同誌)は兩書の初刊年月を明し併せて再刊以後の事を述べ、「字音に於けるM尾N尾の發見に就て」(滿田新造、國學院雜誌)はM尾N尾の區別を明にしたのは太田全齋で、殆んど同時に僧義門、關政方も同様の考證をしてゐるが、本居宣長も之に關して説いてゐることは等の人々の關係を述べ次に此外に隠れたる發見者僧德龍、白井寛陸があつた事を述べ、「國漢の語法的及思想的關係」(高橋龍雄、同誌)は國語の本質が單音語族たる漢字國のそれと全然一致するところが出来ない原理から、いかに漢字漢文が崇拜されても國文派を漢文派に變へる事は出来なかつたが漢語漢字が多く國語中に入れられたのは音符の拍子に適合する故であることし其他「歌俗研究」小國重年翁の研究に就て、「小山正、國語と國文學」琉球語に於ける方言鼻音(宮良當壯、國學院雜

誌)「國語上から觀た一茶」(安藤和風、早稻田文學)等がある。醫學電氣學に就ては「僧醫の發達及び施藥院と悲田院の沿革」(上田進城、密宗學報)「本邦電氣學の祖橋本曇齋」(後藤肅堂、歴史地理)「本邦電氣學界の二祖平賀源内と橋本宗吉」(同人、中央史壇)「本邦電氣學史上に於ける平賀源内とその時代」(同人、同誌)等があり、教育方面では「徳川時代に於ける平民子弟教育に就て」(今村孝三、歴史地理)は主として日本教育史資料に就て寺子屋教育の教育史上特筆すべきものたるを述べ、「舊學習院の教育とその學風」(板澤武雄、同誌)は本院創立の主意が廢黜せる公家風儀の匡正にあつて其の教育方針は智育より德育を重んじ、學風は初めは幕府の干渉の爲め朱子學を奉じたが後には學統を異にせる講師も加はつて國書の講讀も加へられるに至つたこと次に教育の實況等に就て述べて居る。其他「平安朝時代の所謂私學に就て」(高橋俊乘、同誌)にも亦觀るべきものがある。風俗方面では「藤原時代より鎌倉時代に至る女装の變移に就て」(江馬務、風俗研究)は之を著用次第の方面より觀察して其の變移の性

質は實用的に簡單に變つたのであるが其原因は鎌倉時代が質素を尙ぶ武士跋扈の時代で公卿が政治的經濟的に關東から壓迫された事と武斷の時代精神の影響に依るに説き「鎌倉時代風俗研究の一方面」(柴田實、歴史地理)は建久二年以來正慶元年まで鎌倉時代を通じて屢々發布された朝廷の新制は當時の風俗世相を窺ふべき貴重な資料であるとして第一に當時の奢侈に注意し、服飾其他の過差の停止は新制の主要なる條項の一端殆んど總ての新制に繰返されてゐることを通じて時人の好尚等を窺ひ、此時代はたゞ質朴簡素の時代であつたことを考の誤つてゐる事を述べ尙ほ群飲賭博鷹狩養禽の流行、人身賣買等の習俗のあつた事を述べ、それ等は皆社會の病的現象であるが唯一つ健全なる習俗と見るべきものに隣保間相互扶助の制があつたこと説き「日本近世の奢侈について」(西田直二郎、史學雜誌)は先づ中世に於ける奢侈の觀念を述べ當時は歴史の長き經驗より生じた一の人生觀とも稱すべきものがあつたが、夫には人間の歴史は輪廻的のものとする考へに奢る者久しからずとの思想とがあり、此

の後者は中世武家時代が生長させ武家政治が夫を明瞭ならしめ、後永く武家政治と抱合して來たものである、武門政治興起以前の歴史に現はれてゐる奢侈觀は餘程寛容なものであつたが武家政治時代に入つてからは奢侈に對する批評が嚴しく呪詛的の語が著しく現はれてゐる、平安朝では祭禮に於ける奢侈の禁止は主として奢侈それ自身に對する抑制であつたが鎌倉時代には信仰其物に奢侈が反するものと考へられた、近世徳川時代には奢侈に對する反抗精神は幕府創立の初より顯著なものであつたが、實際に於ては法制上奢侈を禁止する事は出来なかつた、近世奢侈が中世の夫と異なる點は中世では奢侈を恐怖する思想があり其思想の基礎は宗教的であつたに反し近世の奢侈は現世的のものであつた、又近世に於ける財の性質が中世の夫と相違して來た爲め兩者の社會的意義を異にして居るが近世財の性質は近世が發展させた資本主義的制度和其精神と關係して居り、此の資本主義的制度を助け近世奢侈増進の因をなした大なる歴史的事實は鑛山業の發達と商工業の發達と都市の發達であるに論じてある

「細長の研究」(高橋健自、歴史と地理)は近代の細長の典據は鎌倉時代の記録に見え藤原時代のは關腋の袍に類したものであり、南北朝時代には狩衣と同式にもなつたやうである云ひ次に其の用途を述べ「近世女子結髪の淵源」(同人、史林)は女子結髪の搖籃期は室町時代末にあつて髻は初期では後世の如く多種でなく唐輪、兵庫及び角ぐるは主として少年の結髪から來り、島田髻と笠髻とは女子のものとして成立したものであると述べ、其他「髮置の儀式」(江馬務、風俗研究)「徳川時代に於ける子おろしの研究」(徳田彦安、歴史地理)「近世の旅行に關する風俗」(粟野秀穂、風俗研究)「扇の史的研究」(江馬務、同誌)「手拭の歴史」(同人、同誌)等がある。舞曲・演劇方面では「獅子舞の研究附大神樂と越後獅子の研究」(江馬務、風俗研究)は獅子舞は平安朝に唐より傳り夫が魔除の意味を持つに至つたのは獅子と兎と、天祿辟邪といふ動物系統と獅子舞の系統とが混同され従つて祥瑞祓除の意が加はつたのである、永正末年饑饉疫病のあつた時伊勢山田で獅子頭を作つて祓を爲したが伊勢大神樂の起原

である、獅子舞は無骨即ち輕業を爲し、之が越後獅子となつたらしいと述べ「幸若舞曲」(高野辰之、國學院雜誌)は猿樂が室町時代に軟派藝の代表者であつたに對し尙武本位の硬派藝に終始したものは幸若舞曲であつた之は聲明系のもので初めは平曲や謠曲に類似して居つたことへらるゝが大江山若の曲風は萬歳に類似し平曲謠曲には離れて居るらしいと云ひ「筑後柳川の幸若舞を觀て」(岩橋小彌太、風俗研究)は此舞の名稱詞章等に就て述べて觀覽の模様を記し「西の宮淡路京都の操の關係」(志田義秀、國語と國文學)は淡路の操に關する史料を紹介し操發展史上の西の宮淡路京都の關係を論じ尙傀儡道蓋坊百太夫に就ての研究をも附加して居り、其他「能の戲曲的成分」(野上豊一郎、同誌)「伎樂に就いて」(内藤藤一郎、佛教美術)などがある。美術・建築方面では「御物金銅大幡に就て」(香取秀眞、現代佛教)は法隆寺獻納の金銅大幡を解説しその製作年代は飛鳥時代であるとし「淨土變の形式」(源豊宗、佛教美術)は法隆寺金堂壁畫の四淨土、敦煌の淨土變、當麻曼荼羅等を觀察し今日現存する淨土圖には三箇

の形式がある事を述べ「俱舍曼荼羅について」(秋山天、現代佛教)は平安期の作で東大寺に傳はる俱舍曼荼羅に就て述べ「佛教藝術と大和繪」(中川忠順、中央佛教)は線彩色彩によつて佛畫と大和繪との關係を述べ「文獻に見えたる四十八體佛」(石崎達二、佛教研究)は法隆寺舊藏現今御物の四十八體佛は元四十九體で往古橘寺に藏されたものであるが現存の御物は純粹の橘寺の佛でなく内容は變つてゐることを述べ「我國に於ける木彫の獨立」(源豊宗、佛教美術)は平安朝には木彫のみが發達したが夫は信仰上の理由にも依るが又彫刻に最も適した木材が豊富であつた事及び翻波式刀法が完成した事にもよる、斯くて日本

國東半島にある一種の石塔婆に就き此種の塔は何れも石造で基礎、臺座、塔身、笠、相輪の五部より成り他の石塔に比べて様式上大差がある事を述べて其實例を示し、次に如何にしてかやうな塔が出来たかを考へ尙ほ吉木の多層塔の事を附説して之は鎌倉時代の中葉若くは中葉を少し過ぎた位に出来たものらしいことを述べ「阿波の板碑其他」(同人、同誌)は去年三月調査せられた阿波の板碑に就て述べ、種子の圖案化に獨特の手腕があり、種子に背光を附たものがあり、佛像を恰好よく線刻したのがあり、石質の關係上多くは薄いが花崗岩様の石を用ゐた物は厚く種子又は佛像の上を璣路を下けた天蓋で裝飾した物はなく、銘文は多く簡單であり、彼岸の中日に造立したのが多く、碑面に五輪を線刻したのがあり、逆修のものも多く、墨書のものがなく、連碑は少ない事を其特色とし尙ほ夫を關東豊後の板碑と比較し、次に石燈、礎石等に就て述べ其他「帝室御物法隆寺舍利殿障子繪に就て」(藤懸靜也、國華)「正倉院の密陀繪に就いて」(吉田包春、佛教美術)「天平時代の染織工藝に就て」(明石染人、同誌)「佛

像の表現線に就て」(三上和志、大乘)、「足利將軍の林泉愛好と河原者の擡頭に就て」(外山英策、國華)、「明治初年の彫刻に就て」(高村光雲、國華)等がある。文化史方面では「入宋僧並に歸化宋僧と宋代文化の移植」(木宮泰彦、禪宗)は南宋時代に於ける入宋僧や歸化宋僧が南宋の爛熟せる禪宗を傳へ鎌倉武士を始め上流社會に及した心的影響は大であつたが、同時に宋の文化を傳へ我が文化に著しい影響を與へた事も看過し難い。建築美術等に對する貢獻を述べ「南北朝時代の出版事業」(中村直勝、歴史と地理)は此時代には五山版の開版が出版界最大の光輝であつたとして其特色を挙げ又正平版論語、曆應の高師直の首楞嚴義疏注經、尊氏基氏義詮の大般若經、永徳の心經開版を叙し、當代に出版事業が盛であつた理由を古來の寫經が漸次遊戲化して版經が流行した事、淨土教思想中に多數供養の思想があつて之には版經が最簡便であつた事、多數人より募財し法縁を結ばせる事が行はれ又歓迎された事、武士は罪劫觀を深く感じた爲め經卷開版の助勢を進んで爲した事、假名曆の普及が出版事業を促

進した事、文化の中心が京都外に所在に出來た事、支那朝鮮の出版事業の刺戟、五山詩僧の宋元文化に摸倣せんとした事の八因に歸し「江戸幕府の禁書政策」(中村喜代三、史林)は先づ輸入漢書に對して寛永の禁書、貞享の嚴禁享保の弛禁、輸入漢書の査法に就て述べて次に洋書に對する幕府の態度を見た後、此禁書策は政治上の鎖國と相俟つて近世の文化形成に大なる影響を與へたもので之によつて西洋との思想的交渉は一時斷絶し殊に科學思想の進歩は著しく阻害されたが其間國民思想の確立を期し日本獨特の文化を圓熟せしめて他日發展の基礎に備へ得た事を考ふれば強ち有害無益であつたとは云へない。斷じ、其他にも「日本印刷史」(龍肅、中央史壇)がある。「松野、後藤」宗教方面では佛教に關しては「醍醐本諸寺緣起所收『元興寺緣起』に就いて」(喜田貞吉、史林)は先づ元興寺緣起の僞作なる事其の僞作年代は扶桑略記伊呂波字類抄の作られた以後長寛三年以前である事を述べ次に元興法興兩寺は元別寺であつたが奈良京移轉後合併した、向原寺即豐浦寺と元興寺と同一視する事は此緣起一類の物以外

に未だ見ない、此兩寺は別寺で貞觀五年には共に十八大寺中に列せられてゐたが豊浦寺も後に元興寺の末寺となり後又同寺に合併されて兩寺同一説を生ずるに至つたのであらう又葛城寺も同寺なりとする説が唱へ出されたが此寺は元別寺で、廢滅後元興寺に合併されたい、法滿寺も亦合併された寺の一であつたかも知れぬ、建通寺も同様に元興寺に併合された寺で後に其由來が忘れられ豐浦尼寺なる元興寺に對し別に法師寺の存在を想像し夫を法興寺に擬する説が起つたのであつたかも知れぬ又多武峯緣起は植槻寺を元興寺に附會し伊呂波字類抄は斑鳩なる中宮尼寺をも法興寺に附會せんとして居るが、畢竟法興寺が早く元興寺に併合されて其名を失ひ、元興寺も亦衰滅して由來を忘れられたが爲に外ならぬと述べ「奈良時代の淨土教に就て」(禿氏祐祥、龍谷大學論叢)は此時代の佛教は六朝隋唐の佛教を繼承し幾分國風を加味したもので、支那では三論宗殊に古三論に附隨して淨土教が行はれたから我國でも此の傾向で進んだ我國淨土教の開拓者は三論系統の惠隱で彼の講説と智光の撰述とは上代

淨土教關係事蹟の核心を爲すものであると云ひ「傳教大師の願文に就て」(稻葉園成、佛教研究)は此願文は大師廿歳の時始めて叡山に籠つてから間もない頃に書かれたものに相違ない、古來大師の天台修學期は籠山以後の事とされてゐるが願文を研究せば籠山以前の事とせねばならぬと云ひ「新法性宗の而今而後」(日下大癡、龍谷大學論叢)は後世山家大師の新宗を祈禱佛教と名けて専ら現世祈禱を目的とした様に斷ずるは妄斷で、出離生死の聖道として圓頓一乘の新法性宗であつたこと云ふ事より大師の新法華宗鎮護國家の着想、四宗統合の着想の事を述べ次て大師新宗創立の動機が泰範の去就にあつたこの説は尙考究の餘地のある事、大師の後圓仁圓珍は何故止觀業よりも遮那業に没頭したかといふ事等を述べ「我國古代に於ける國家經典の意義」(日下無倫、佛教研究)は古代に於て金光明仁王法華大般若經が何故鎮護國家の經典として用ひられたかを考察し「聲明國文たる教化について」(志田義秀、現代佛教)は教化の名目が最も早く見えるのは西宮記で平安末期から鎌倉初期へかけて教化の新

作されたもの愈々多くなつたらしいと述べ、「時衆の原始教團に就いて」(高千穂徹乘、龍谷大學論叢)は時衆の名稱、教義の特色、相承等に就て述べ、「法然主著の流傳について」(石井教道、現代佛教)は選擇集が其成立から聖間に至るまで如何に流傳したかを述べ、「法然の戒律」(大野法道、同誌)は法然が多數の人に戒を施した事は彼の主張に矛盾するこゝで此問題に對する古來の解決案を擧げて之れ等の説が安定を與へ得ない理由を述べ、圓戒の精神は本來之れを解決してゐたのであると云ひ「淨土布薩式の研究」(井川定慶、藝文)は之を法然上人の自作とする説に對する疑難、金剛寶戒章及十二門戒儀との比較、淨土布薩式の内容、其の創定を述べ次に上人の自作なる淨土布薩式は世に出でしやさへも確でないといふ事より其の流傳變遷を述べ「親鸞の教行信證成立の時處に就て」(藤原猶雪、中央史壇)は夫を元仁元年稻田にて成立したものと考へたいと云ひ「吾國の神祇に對する眞宗の態度」(河野法雪、佛教研究)は本地垂迹説が眞宗にも採用され神祇を排斥せず信念上却て敬神となり宗義に抵觸しない

と述べ「存覺上人の教義と日蓮上人」(内田舜圓、龍谷大學論叢)は存覺が法然の古に還り念佛を主張したのは主として對日蓮にあつたからで此の目的より云へば彼の所説は逆轉と云ふべきでないと述べ「蓮如上人と本尊並に影像考」(佐々木芳雄、同誌)は蓮如の依用した本尊並に影像に關し資料を紹介し彼は覺如存覺の本尊統一の理想を受けて之を發揚するに努めたと云ひ「高田律の形容に就て」(生桑寬明、現代佛教)は眞宗にて戒律思想を高唱したのは高田の圓邊時代である事を述べ「維新當時の神佛分離」(寺本慧達、龍谷大學論叢)は當時神佛を公平に分離するに非ずして從來佛教が恰も國教的地位を得て居つたのを神人に奪ひ與へんしたので佛教を出來得べくんば無きものにしやうとの底意が當局に存して居つたが佛教界は兎も角も其の廢毀を救ひ政府の宗教政策を破綻せしめたと述べ「宋版大藏經の零本」(藤堂祐範、歴史と地理)は石清水八幡宮舊藏の福州版大藏經は宮内省圖書寮に藏せられてゐるが其の零本約七百卷が大阪市森本家に有るとして夫を紹介し、之を同時に出版曆應康正應仁明治に

書繼いた文書を掲げて大日本史料にも收載されない貴重なものであること述べ「宋版大藏經の零本追記附慶政上人の飯糶喜捨に就て」(同人、同誌)は右の零本が其後宮内省に獻納された事及び此經の版木喜捨主の一人なる慶政の事を述べ「羽後仙北金澤八幡神社の古寫經に就て」(深澤多市、同誌)は同社所藏の貞治應安嘉慶の古寫般若經四百八十三卷の各卷の奥書は地方史佛教文化史研究上貴重な資料であること述べ「寺院の師資相續と血統相續」(竹島寛、史學雜誌)は寺院は師資相續を原則とするが多くの場合非人情的なものがあつた、平安朝に入り僧侶が墮落して斯かる純理的な相續法を奉ずる事は堪え難くなり遂に戒律違反の血統相續が普く行はれたこと述べ「寺院と賴母子講」(中村直勝、中外日報)は中世農村の經濟問題が寺院の手によりて解決せられて居つた事を示す一例として滋賀縣蒲生郡島村に於ける阿彌陀寺と村民間に結ばれて居た賴母子講の事につき記述し延文二年三年の文書に此講名があり又弘安四年の注進狀に大座の名があるのは輕視すべからざる事で之も一種の賴母子講であつたこと見て大差あるまい

が、たゞ前者は寺院中心、後者は神社中心であつた點が違つてゐること述べ其他「僧綱職の補任手續に就いて」(荒木良仙、現代佛教)「宮中二間の觀音二間夜居護持僧之事」(和田大圓、密宗學報)「講式の歴史的考察」(築土餘寛、現代佛教)「梁塵秘抄に現れたる佛教」(大野法靈、同誌)「説教について」(橋川正、歴史と地理)「日本古天台研究の必要を論ず」(島地大等、思想)「親鸞の信仰過程に就て」(好村春基、現代佛教)「本願寺を歴史上より見て」(赤堀又次郎、中央史壇)「徳川時代に於ける眞言論義の張行に就いて」(荒本良仙、歴史地理)等があり、僧傳關係のものには「仁康上人入宋説に就て」(西岡虎之助、同誌)は彼の入宋に關する正確な史料無き事より其の入宋説を否定し、「配流の阿闍梨道範」(上田進城、密宗學報)は金剛峰寺の道範が仁治年中同寺と大傳法院との紛争に座して讃岐に配流された事に就て述べ「江東に於ける一条和尚」(牧野信之助、歴史と地理)は一条の永源寺入寺を機縁として禪風が江東に再起し皇室との關係が密接になり、一条と皇室との關係は新興諸禪院と皇室とを結付ける事になつた

きて彼の永源寺時代の行實を述べ其の感化は力強いものであつたこと云つて居る其他「憐昭とその卽身成佛義に就て」(裕慈弘、現代佛教)「鳥羽僧正の傳記史料について」(土宜覺了、密宗學報)「願行上人の東寺修造」(同人、同誌)「貧僧無住のこころ」(橋川正、藝文)「法然上人影像」(其の傳説の種類)「井川定慶、同誌」蓮如上人の親鸞繪像(佐々木芳雄、中外日報)「法住菴顯證上人御傳について」(土宜覺了、密宗學報)「正三道人及其嗣惠中師」(角張月峰、禪宗)「白隱とその時代」(大崎龍淵、禪宗)「淨嚴和尚とその時代の教界」(上田進城、密宗學報)「盤谷仙厓兩和尚妙心轉位式史料」(後藤光村、禪宗)「明如上人の明治初年の政教問題」(武内如洋、中央佛教)等がある。神祇神社に就ては「大嘗祭の祭神」(清水正鏡、國學院雜誌)は從來種々の説あるも悠紀殿に招請し奉るは天照太神一座に限り主基殿に招請するは太神以外の諸神即ち左右京二條坐神等總て七十一坐に限ること述べ「火之迦具土神の神格に就いて」(中島悅次、中央史壇)は此神は火の神であるが又電光日光火山の火等の性質を具へてゐること述べ「鹽土

神と武甕槌神との神格に就いて」(同人、同誌)は前者は海神たること同時に智慧の神と信ぜられ後者は雷霆神たること同時に劍の神とせられてゐたこと述べ「延暦儀式帳より見たる古代の神祭」(山口鏡之助、歴史地理)は皇太神宮儀式帳も止由氣宮儀式帳も共に延暦廿三年に其神宮より上申したものであるが前者は其内容が同一時代の記録とは思はれぬ極めて誤の多いものである、後者は前者に比し其記事は稍や整頓してゐるが此書は止由氣宮が發展した時代に古式に通ぜぬ人が前者に倣つて作成したものと云ふ、其時には前者にも手が加へられ此兩帳共に延喜式に繼承してあるから此の偽作は延暦延喜の間に行はれたものらしい、前者は延暦より以前養老前後の祭祀の状態を研究するに絶好の資料であり後者は古代の祭祀の一變した時代の思想を比較するに好資料であること神社の月祭の事、神籬磐座、齋宮等に就て述べ「丹後外宮の造營に就て」(井川定慶、藝文)は本社の記事棟札等により其造營修補の事を述べてある、其他「古代文藝に見えたる神」(大西貞治、國語と國文學)等がある。神道に於ては

「天理教發展考」(米田稔、中外日報)は同教が發展したのは宗風が單に人倫道德の範圍内にある事、宗旨宗策の中心が祈禱禁厭にある事、未來思想が薄く從て死の思惟が幻想的なる事、宣教態度が割合に排他的でない事、教會組織が簡單なる事に依る事述べ、基督教に關しては、「明治初年に於ける切支丹迫害の思想背景」(姉崎正治、宗教研究)は長崎浦上郷なる潜伏キリシタン迫害一件に就て當時國教主義の遂行キリシタン禁制の斷行とは相呼應して歩を進め其間に外國使臣の抗議も絶えず行はれたさいふ事より此間に於ける國教主義の思想を觀察し併せて信者の思想をも考究してあり「切支丹宗門の迫害補遺」(同人、同誌)は大村の切支丹事件に關する同藩の元祿三年の記録に就て述べてある。信仰に關するものでは「日の鏡の信仰に就て」(中島悅次、中央史壇)は八咫鏡は太陽の表象物として作られたものであらう、日の神あまてらす大神が人格化される其靈代の神鏡は太陽神自身の子孫に下賜されたものさいふ信仰に進み鏡を見ること我を見る如くせよとの神勅さへ生れるやうになつたのは自

然の信仰經過であらう又此の神鏡は皇室の守護神であり皇室の旗印であつて皇室に抗する者から皇室を守護するさいふ信仰があつたらしいと説き「我が太陽トーチムに就て」(同人、同誌)は天照大神の神名より考察して夫は太陽神自身ではなく日の神に奉仕する日の妻である事が推想される而して此二者が同一視化されて成つたものが天照大神であるとし、我國民にも太陽神を祖先とし守護神とする信仰があつたこと考へる事は無理ではなからうと云ひ「日本古代人の神性觀念に就て」(岡本隆男、中外日報)は神話には宗教的意義を備へてゐるは古代人の宗教信仰の事實の世界の表現であるとしてアストンの日本神道論の所説を駁し紀の神代卷に草木成能言語とあるは多神教信者であつた日本古代人の信仰を物語るもので、神代の古傳説に現はれたる祖神としての神々も神であるこの信念の後に祖神としてまつられたのであらうと説き「黄泉戸喫について」(堀維孝、國學院雜誌)は黄泉戸喫は泉界の食物を食せば再び現世に歸る事が出来ぬこの信仰が其内容となつてゐるが、斯の如き信仰は世界的であつて

我國の特生でないを見る方が穩當であらうと云ひ「言葉
の信仰」(土井良、國語教育)は原始社會では言葉も生き
物又は生き物を宿してゐるものと云ひて人に働きかける靈
力を持つて信ぜられそこに萬葉集の言靈の信仰が生じ、
それが特定の言葉に對して之を認めた時に呪文となり尙
ほ進んで文書にも呪力を認めるやうになるに説き「神誓
裁判について」(牧野信之助、史林)は我國固有の神に對し
て誓約する風習が佛教思想と結合して起請文が發生した
が探湯も神と法との間に重大な役を演じた古俗であるこ
いつて其例を舉げ我國が明に宗教法訴期を脱し得たのは
明治時代であつたと述べて「嚴島平家納經と藤原末期の信
仰」(石田茂作、現代佛教)は此經の裝飾に蓮の模様が多
いのは法華經信仰並に淨土念佛思想からで又獨鈷輪寶等
の圖案を用ひてあるは時代教學が密教本位であつた事を
裏書するものであらう。殊に心經及多寶品に五輪塔を用
ひた裝飾があるのは千本塔婆と思想的に同じ立場にある
もので經と塔とを一緒にしやうとする思想として貴い資
料であり又多寶品に見える寶輪を色分けせるは大日經疏

の思想と關係あるものとして深い意味のある事で各卷の
見返しの繪と經の内容とが關係ある事は注意すべきであ
る。又此經には三種法華の信仰が實例を以て示されてゐ
る如く思ふと云ひ、「南北朝時代に於ける水無瀬御影堂」
(魚澄惣五郎、龍谷大學論叢)は先づ此堂の由來を述べ次
に後鳥羽院の崩後皇室や幕府に不幸が続いたのは同院の
御怨念の致す所と考へ延いて天下に變事ある毎に院の御
祟が連想されたので朝幕共盛んに院の冥福を薦めんとし
南北朝時代には此堂は厚き崇敬を受け堂領は次第に増さ
れた是れ社會状態の不安に伴ひ佛教の因果思想と關聯し
た考から來たもので殊に足利氏にあつては恐怖は容易な
らざるものであり日夜院の御靈を慰め奉る事に頭を惱め
南朝でも其の御加護を蒙り院の歡感を遂げ且つ御靈を慰
め奉らんとしたのであると述べて「神宮の信仰」(宮地直一、
歴史地理)は戰國時代は神宮と民衆とが最も接觸した時
代で參宮者は驚くべき數に上り遠國の人は屢々參宮出來
なかつたから神宮の分身社を勸請し當代には神明社が遽
に多く設立されたと云ひ、「伊勢神宮千日參と井伊直政」

(中川泉三、歴史地理)は直政が關ヶ原戰の翌月より神宮へ千日參の代參を爲さしめた事を述べ、「民間信仰の地藏菩薩(桂義雷、密宗學報)は地藏尊中特に一般的になりたる六地藏將軍地藏延命地藏の信仰に就て述べ、「曆ミ方位の迷信(新城新藏、同誌)は九星說カ行説の來歴を述べ之に基いて生じた年や日の吉凶相性家相方位の説は信すべからざるものである事を述べ其他「建國の傳説國讓りの段に就て(山口銚之助、歴史地理)貞永式目の首條(河野省三、國學院雜誌)等がある。思想の方面では「上代人の思想(中村孝也、歴史地理)は夫が極めて自由闊達であつた云ひ「本邦民本思想の一象徴(植木直一郎、國學院雜誌)はおほみたからこいふ語の原義は農耕の民こいふ義ではなく主として臣連伴造國造氏上伴緒等を指したものであつたこし其後其の意義に沿革があつた事を述べ「溪嵐拾葉集ミ中世の宗教思想」「平泉澄、史學雜誌)は後醍醐天皇の御代光宗の編せし本書には奇怪なる神佛習合説が有るこて夫等の所説等を擧げ斯くの如きは中世に於ける一般宗教思想の種々相であるこ云ひ「貝原

益軒の天道思想(森下眞男、歴史ミ地理)は彼の天道説の信念に就て説き、彼の學説は大體に於て宋儒の説を祖述したものであるが其の天道に對する信念によつて獨特な一見地を立てた、此の點に彼の思想學説の歴史的價値があり生命があるこ云ひ「神佛分離の思想(寺本慧達、龍谷大學論叢)は一般世人が山崎闇齋の内尊外卑の思想あたりから漸次復古國學者を経るに至つて神佛分離の傾向を辿るに對し闇齋以前の神道界に於て上古よりの反佛教的思想の傳承ミ見られるこ同時に徳川時代に於ける新反抗運動擡頭の前提ミ見らるべきものがあつた事を述べ「武家存立の思想(藤井甚太郎、中央史壇)は明治維新の際は總てのものは勤王の彩を有してゐたにも拘らず佐幕論こいふ勤王反對の思想が影薄き年らも存して居た、之は古くから有つた武家存立の思想から來たのであるこて夫等の文獻を紹介し「明治初年に於ける思想界の側面大教宣布述(河野省三、國學院雜誌)は明治の初期に於ける大教宣布運動は之を明治二年神祇官の宣教使を設置した事ミ五年に教部省の教導職を設置した事との二つに

區別し得る、此教化運動に於て注意すべき事は主として神道家による國民的啓蒙運動、教育宗教分離運動の起原大成經神道若しくは聖德太子流神道の復活、囚人教誨の起原を爲した事である云つて居る。(松野)

最後に史料に關するものには、「日本書紀日本紀」(折口信夫、史學)は普通日本紀は日本書紀の略稱といはれるけれども、寧ろ日本紀が正しい稱であるとし、その日本紀編纂以前に日本書なるものがあつて日本紀のもよなつたらしい、但し正史の形にまで完成したかは疑問であるが日本書の一部なる帝王本紀が所謂帝紀ではないかとして編年體の日本紀に對して正史としての日本書の實在を主張したものである(出雲風土記考證(後藤藏四郎))と共に古代史に關する史料の研究に一步を進め得たものであらう。「大日本史の史料探訪につきて」(三浦周行、歴史と地理)大日本史の編纂に際して徳川光圀と史料蒐集のため地方に派遣された史臣との間の往復書案を基礎として史料探訪に對する主従間の熱烈な態度と努力を述べ、蒐集の方針は京都及近畿に主力を注ぎ極力南朝

の史料を搜索し皇室や公卿に對しては圖書の交換によりて史料を得る方法を講じ、而して専ら必要な部分の抄録に止め彰考館の藏書を重複する事を避けて、敢て骨董癖に墮せなかつた事を指摘して居る。更に昨年中に出版された史料を舉げるならば、東京帝國大學史料編纂掛の「大日本史料」は第一編の三、四、第三編の一、第五編の四五、第六編の廿二、第八編の十一、第十二編の廿六を出し、「大日本古文書」は家わけ第九吉川家文書の二、同第十東寺文書の一を發行し「史料綜覽」一、二、三を上梓した。「明治維新神佛分離史料」(村上專精、辻善之助、鴛尾順敬編)が上中を出し「國文東方佛教叢書」(鴛尾順敬編)が文藝、隨筆、註釋、宗義等に分けて關係史料を和譯して收め「近世社會經濟叢書」(本庄榮治郎、土屋喬雄、中村直勝、黒正巖編)がその方面の稀觀書を收めて七冊を出した事「長崎叢書」が長崎に關する文獻を收めた事等を數へる事が出来る、又、古典保存會が「三條家本播磨風土記」「天治本催馬樂抄」「眞福寺本倭名類聚抄」「色葉字類抄」を複製した事、大阪毎日新聞社が「祕籍大觀」にして

日本書紀の古寫本十五種を全部玻璃版に附した事、前田侯爵家の「尊經閣叢刊」が「元弘本古語拾遺」「色葉字類抄」を、稻荷神社が「九條家本延喜式神名帳」「間祝詞」を、共にコロタイプに附して頒布した事等は何れも古書の倂を保存する上に於ても非常に役立つた事と思はれ、史料編纂掛が「古文書時代鑑」上下二帙を發行して典據となるべき故人の筆蹟を示した事、「日本古典全集」(與謝野寛、正宗敢夫、與謝野晶子編)が國史に關する古典を普及せしめた事は共に吾人の深き感謝に値する事であらう。また日本史籍協會が、「維新日乘纂輯三」「三條實萬手録三」「安達清風日記」「會津藩廳記錄一」「坂本龍馬關係文書一、二」「議奏加勢備忘一、二」「吉川經幹周旋記二、三」「淀稻葉家文書」を刊行した事と續群書類従完成會が「續群書類従」を續刊しつゝある事は前年より引續いた事項であるが、これまた編輯刊行者の勞苦を多しせなければならぬ。(中村)

朝鮮史 昨年度の斯界は朝鮮史學と稱する學術雜誌の創刊に依つて光彩を添へ研究論文も多數に發表された先

づ一般的研究には「朝鮮文化史研究」(稻葉君山、單行本)がある。社會、姓の由來、内鮮文化の歴史的差別、樂浪文化の研究、正統論等十八篇は朝鮮史全般に亘る問題を論議した。特種問題研究には「朝鮮の幟に就いて」(松本文三郎、内藤博士還曆祝賀支那學論叢)支那印度日本内地にて見ざる二種あるを指摘し一は陀羅尼幟の變態他は支那記錄の利竿に當るべきものにして何れも新羅時代以來の作に係る、「高麗時代の文籍」(稻葉岩吉、同書)は紹修書院所藏の安珣畫像仿宋山谷詩集注釋苑詞林を紹介し殊に後二者は歐陽詢の筆意ある活字本なるを謂ふ、「高麗の三別抄について」(池内宏、史學雜誌)之が驍勇の士を以て組織せる選軍の名稱であり明宗三年趙位寵の亂を平定せし際に起原し之が馬別抄夜別抄を経て蒙古軍防備の三別抄となり元宗朝まで永續して遂に墮落したもので「高麗惠宗朝の内亂」(瀨野馬熊、同誌)は惠宗崩後堯が定宗となりし爲王規の異圖畫餅に歸したる顛末を叙し「高句麗の五族及五部」(池内宏、東洋學報)は五族は三國時代に行はれし Chan にして五行思想に基いて五方に配當されし

行政區劃の謂には非ず隋書北史所見の五部は區別せなければならぬ。朝鮮語にて外夷を *Yanom* と謂ひ高麗時代には主として攻掠甚だしき女真人を呼ぶ名なれば前後三回我國に襲來せし「刀伊の賊」(同人、史林)は蓋し于山國なきを滅して日本海を横行せし女真人ならむ。「高句麗國民の氣象ミ當時の勢力」(李丙誥、朝鮮史學)は尙武右文の風盛にして困難に堪へ奮闘努力する國民性に富み、「陰陽地理說ミ高麗歷代の遷都論」(同人、同誌)との關係は支那傳來の考にして道説が鼻祖であり法力地方の二元的神祕力に信賴せる高麗史の解釋には此の思想を見るの必要あり。「三國史記の日蝕記事について」(飯島忠夫、東洋學報)は八回共 *Onpohae* の日蝕表に合致するもの中には半島にて目睹し得ざるものあればこは蓋し漢書五行志を借用記入せるものなるべく。「元の世祖ミ耽羅島」(池内宏、同誌)征伐は高麗元宗朝に珍島より逐はれし三別抄の賊が此の島を本據せしが爲で「文永弘安兩役間に於ける日麗元の關係」(中村榮孝、史學雜誌)は麗國が元の世祖の崩後日元の間際に立つ苦境より脱するを得「文永

弘安兩役間の倭寇ミ高麗の對時局策」(青山公亮、同誌)は前者の説を駁せるものである。而して「應永外寇の真相」(三浦周行、支那學論叢)は朝鮮世宗の元年に對馬を伐つた動機ミ經過ミを李氏實錄、老松堂日本行錄、滿濟准后日記等の後出の史料を綜合檢討して此役に關する從來の史料ミ史論ミに批判を加へたものである。王家國家人民信仰の三種に大別して神位の種類祭次由來を叙する「朝鮮に於ける祭祀」(濫江桂藏、朝鮮史學)、天地開闢說ミ神話ミに宗教的民間習俗を加味せる「檀君傳説に就ての管見」(安自山、同誌)、「朝鮮の族譜に就て」(稻葉岩吉、東亞經濟研究)その潤色が元末明初以來行はれ行列は昭穆を明にし結婚相續縁組等の資格及權利義務の據り處となりしも近來は漸次衰微の兆あり「朝鮮國境の史的考察」(同人、朝鮮史學)は渤海國より女真までの變遷を叙し百里長城九城の位置を按じ北鮮の女真地名十四個を解釋し咸鏡道の氏神、東真國の出現、高麗の賤民楊水尺禾尺に説及し「樂浪出土の桃實」(同人、同誌)に仙桃神母の考を探り「支那文化より觀たる樂浪遺品」(同人、朝鮮)明刀、秦

戈、漆器が支那文獻を補證する眞價貴きを謂ひ「李朝初期に於ける進獻色に就て」(鶴見立吉、朝鮮史學) 太宗八年四月明使黃儼の要求に應じ明室に進獻すべき美人を探る爲一般の婚姻を禁じ敬差官を派して良家の女十三歳以上二十五歳までのものを二回までも撰拔し遂に五名が明に獻ぜられた始末を述べ「朝鮮の煙草の起源に就て」(松田甲、朝鮮) 芝峰類説の説を認めて光海君初年に日本より傳るこを唱ふ。高麗忠宣王元年八月江陵道存撫使が香木千五百條を管内九所に分埋し彌勒の下生に同生して龍華會の法々に浴せむせし遺物「三日浦の埋香碑」(藤田亮策、朝鮮史學) 齊浦釜山浦鹽浦が互市釣魚の地として對馬人に許されし「鮮初に於ける對對馬關係ニ三浦の開港」(瀨野馬熊、同誌) 朝鮮世宗廿五年朝鮮對馬間に結ばれた「正統癸亥約の由來」(同人、同誌) 等あり「李朝時代の水軍」(小田省吾、同誌) は經國大典によりて水軍節度使の職權並に配備の大勢總體、英祖十六年田雲祥考案の海船の能力、機張、竹島以下陽陵浦に至る十四船廠の考定を爲せるは、李舜臣の使用せし龜甲船を見て「甲

鐵艦は朝鮮の發明なり」(太田保一郎、中央史壇) 關聯する問題で全羅北道茂朱の「赤裳史庫訪聞記」(稻葉君山、朝鮮史學) も興味深い記事である。歴史地理研究として「朝鮮地名の考説」(中村新太郎、地球) は借字多きを注意し「朝鮮平安北道南市地方の部落名」(向山武男、地球) は丘陵及海岸低地の色彩を表はせるもの多い。百濟の蓋鹵王が廿一年に高句麗の長壽王に殺されし阿且城は北漢山附近の廣津里の土城なりとする「阿且城址考」(松島惇、朝鮮) 之を真書せる「阿且城址に就ての卑見」(黒井治徳、同誌) 「傳説の都開城ニ其古蹟名勝」(川口卯橋、朝鮮史學) につき高麗王氏を山東省より移住せし王景の子孫とするこゝ、扶蘇山は即松嶽にして唐の肅宗の渡鮮説は支那商船が禮西江を溯江せし語に淵源する記述、「高麗三蘇に就て」(李丙壽、同誌) 新溪郡の箕蓬山が北蘇、白馬山が右蘇、白岳山が左蘇なるを考證せる、光海君六年に權盼の施設せし「釜山鎮の永嘉臺」(松田甲、朝鮮) は釜山築港の偉業を語り日本への通信使の出帆港として意義あり、豆毛浦倭館草梁倭館等を説き後者の遺址を釜山市街大廳

町本町三丁目の間に擬する「釜山に於ける倭館の變遷とその遺址」(小田省吾、朝鮮史學)文祿慶長役に於ける「南韓沿岸築城の遺跡」(同人、同誌)を訪ねて西生浦城を蔚山郡西生浦林浪浦城を東萊郡森浪浦とするなご文祿役二十城慶長役七城の遺跡を探りたるは「南韓に於ける文祿慶長役の戰跡」(同人、同誌)を探りて蔚山城泗川新寨順天城に於ける日鮮交戰の始末を叙して泗川城の石曼子(島津)の勇名が朝鮮軍を驚かせることを謂へるご姉妹篇である「朝鮮の古き地學」(川崎繁太郎、朝鮮)は排水、野勢山形土性水理朝山朝水を吟味して風水説が盛である。經濟社會には「會寧開市に就て」(鶴見立吉、朝鮮史學)朝鮮の外交心理を察知すべく「白丁の差別撤廢運動」(柏木守人、東洋)は張志弼李學贊の衡平社運動が經濟運動に方向を轉じつゝあるを謂ふ。言語文字史料には高句麗故國國王時代乙巴素の作りし時調に濫觴する「朝鮮の古歌と朝鮮人」(孫普泰、同誌)の生活的理想を考へたるもの、「朝鮮の子守唄と婦謠」(同人、東洋)の關係あり「朝鮮語の本質より見たる朝鮮文化」(安白山、朝鮮史學)は母音の數二十

一なる點に於て世界第一位に在り單語數が日本語の二倍にて六萬以上なるは世界の第三位に在りその上中間音の多きごは古文化の榮えたることを語れるものである。「諺文組立法の起源に就て」(黒井治徳、朝鮮)梵語緣由説を提唱するは「朝鮮諺文の淵源」(安廓、藝文)を漢字音整理の際樂章の漢字音を較正しその爲一定の音表を定めたる樂譜字起原説を唱ふるご相對すべき論陣である。高句麗字音が北方系、百濟字音が南方系に屬し現朝鮮字音は新羅の半島統一に淵源すれば現朝鮮字音中に百濟傳來の日本吳音ご類似するものある所以を論證せる「朝鮮字音ご日本吳音ごの類似點に就て」(瀧田新造、東洋學報)の研究も有益なる勞作である。「樂浪遺蹟出土の漆器銘文」(内藤虎次郎、藝文)二十七篇を解讀して漢代工官の所在地を漢書地理志にて列舉し史書の缺を補證する價值を認め前漢末の文化が極度に半島に達せし状態を想像し「再び樂浪出土の漆器銘文に就て」(同人、同誌)鹽鐵論の記載を指摘せるは「樂浪出土漆器の銘文中に見ゆる洎工に就いて」(原田淑人、史學雜誌)關野博士や小場氏の彫字説、

那波學士や之に賛成せられた内藤博士の形字説の上に更に流字説を提出した。「朝鮮海印寺經版攷」(大屋徳城、

東洋學報)は大藏經補板並に藏外雜板を佛教文獻學の立脚地より研究し、「若木石塔記の解讀」(前間恭作、同誌)

は新羅高麗時代の紙文書中最古の若木郡淨兜寺石塔造成記を讀んだ。内鮮關係には「朝鮮より出でたる佐賀の儒

者洪浩然」(松田甲、朝鮮)が鍋島直茂が晋州城の戰に捕へたる少年にしてその五世の孫洪安常に古賀精里の妹の

入嫁し子無くして精里の子燿が養はれし話、「朝鮮人を祖先とせる熊本の學者高本紫溟」(同人、同誌)が細川忠興

に捕へられた慶尙道仁同縣監李宗閑の子孫なる話、「山口の洞春寺の櫻圃文庫」(同人、同誌)、「朝鮮通信使の江戸

參向道中」(瀨野馬熊、同誌)の有様を碧軒隨筆細川家記にて説明せるあり。藝術方面には「朝鮮の美術工藝」(關

野貞、東洋史講座)の概説、「朝鮮の雅樂に就て」(安自山朝鮮史學)三國時代に宗教的社會的の二派となり北方の

ものが雄壯嚴肅南方のものが柔温となりし經緯を叙せる、「開城に於ける高麗燒の祕藏家」(善生永助、朝鮮)中田

市五郎氏所藏の白磁天目繪高麗三島手を紹介し慶尙南道河東郡及山西郡の白磁土以下陶土の分布を詳説し、此等の逸品が主として全羅南道唐津郡大口面地方にて製作せられたることを謂へるがある。「那波」

東洋史 我が東洋史學界が逐年進歩の迹著しきは毎年本項を執筆する筆者に綜合的に痛感せらるゝ、所で研究發表の量に於てこそ年々大した増減はないがその質に於ては逐年勝れ愈々微に入り細を窮む共に従來看過せられた方面に研究の歩武を進むる趨勢を生じた。殊に昨大正十五年度に於ては四項の特筆すべき慶事も起つた。一は東洋史講座が斯學普及の所期の目的を果たして完了せしこゝ二は一般に史料の批判研究が旺盛になりしこゝ三は内藤博士還曆祝賀支那學論叢の刊行、四は羽田亨博士の手によりペリオ博士の諒解を得て兩博士共編の名の下に巴里にある燉煌發見史料をば燉煌遺書と題して續々刊行するこゝの創められたこゝで、殊に後三者の斯學の進運に貢獻する所は大なるものがある。今吾人が大觀する所を十四項に分ち先づ一般的時事的方面より羅列せむに、

「滿蒙に於ける我國の特殊地位」(末廣重雄、法學論叢)は日英同盟協約日露密約日佛協約對支借款團代表者の巴里會議宣言により確保せられたるものなるも世界戰爭を境界として多大の相異を生じ稍、々不利を生じたるは争ふべからず「ロシアの東洋研究」レニングラート東洋語學院(金田常三郎、東洋)が革命後愈々眞劍味を加へ勞働階級と謂ふ大衆の爲の必要なる知識として實用的に研究せられ「蒙古に於けるアメリカ學術探検隊の仕事」(鳥居龍藏、太陽)は單に動物化石學の收穫に止まつて居る。概説ものは「太古より後漢まで」(橋本増吉)「後漢末より南宋の中世まで」(中村久四郎)「蒙古の勃興より明末まで」(高桑駒吉)「清朝初世より現代まで」(松井等)「古代印度の文化」(武田豊四郎、以上東洋史講座)が説かれた。次に政治問題にては「漢代政治思想の一面」(津田左右吉、滿鮮地理歴史研究報告第拾壹)なる五德轉移説正朔服色の變改、改元易號、郊祀封禪の典禮等は皆民衆の爲にするにあらで王室の權威を立て王者の欲望を充たす爲にして此の中には宗教的信仰や呪術的思想より採りしもの多く迷信

的空氣の王室に濃厚なる結果人民が實利的となりしもので「支那史に見ゆる制度の二重體系」(稻葉君山、朝鮮)は鮮卑族の立てし燕國より濫觴し遼金元清皆蕃漢の風俗を兩立せしめむが爲に軍政行政の諸制度が二重となり「南朝に於ける士庶區別に就いて」(岡崎文夫、内藤博士還曆祝賀支那學論叢)見れば士は治者階級にして復除の社會的特權を有し籍も黃白の別を生じ宋に至りて同伍の犯罪より士類が解放せられ齊梁の際此制を維持するに努められたことあり、武昌の兵變、張念一の盜亂より白蓮教亂四十三の叛亂回教徒の亂なき「清朝の諸叛亂」支那叛亂の性質(矢野仁一、史林)を見るに何れも政府が事端を激成するを恐れて徹底的に懲治せざりし爲亂徒熄滅せず却つて抑壓の爲各地方に浸淫したものである。白蓮教の亂に就いて(同人、支那學論叢)見ても革命的祕密結社なるに係らず一人の中心人物無く守城僭號のこまなく革命的性質なく純流賊的叛亂に終りしは人心未だ清朝を去らざりしが爲で「嘉慶時代の艇盜の亂に就いて」(同人、歴史地理)見れば之は廣東福建浙江三省の海疆一帯に限

られ何れも新阮氏の餘黨鄭七張保吳知青烏石二等の企つる所で紅黃藍黑白の諸旗に分れその大亂となりしは主として安南の招誘保護を沿岸人民が糧米火藥を接濟せし爲である。『韋氏の官制索隱』(稻葉岩吉、支那研究)所見の神權時代天子居山說專制時代宰相用奴說職官推移説を是認すれば支那民族の政治體系はラテン系の西歐諸國と甚だしき差異あり、順治より康熙に亘る滿洲人の仁政と康熙乾隆帝の文學獎勵による「清朝盛時の平和と文運」(矢野仁一、同誌)は康熙帝の朱子學尊崇康熙乾隆兩帝各六回の江浙巡幸にも源因するもので支那數千年の歴史の集大成たる「近代支那史」(同人)をば史傳家註釋纂輯家考證家支那學者特種事實研究家に倣はざる一種獨特の見解を以て見れば支那社會の固定性はよく騷亂の影響を中性化し、社會人民は政治に興味を有せざるなれば、清朝初期に西洋諸國との關係を生ずるや古の道德的政治文化一朝にして迹を消したことを清朝全史の上より察することが出来る。然れば社會的史觀より「支那改造論」(田崎仁義)を謂へば支那が列國分立か超國家的大一統かの何れかに限ら

る、が經濟革命の見地よりすれば列國分立ならむと考へらる、が「田崎博士の支那改造論を讀む」(西山榮久、東亞經濟研究)者には列國分立説も可能性無しと考へられる。「支那猥談」(桑原隲藏、外交時報)は臨城事件を批判して支那國民性に及び支那人の性格や能力についてリチャルド氏の説を是認し現今の支那學生の妄動が果して愛國的精神の發露なるや否や疑ふべし、「支那の國際管理に就て」(木村増太郎、支那研究)見れば一八九四年頃より唱へられ一九一九年英人ウッドヘット氏米人クラーク氏により高唱され之が一九二一年ブランド氏によりて世界の代表意見となりしも要は財政の紊亂窮乏に淵源せる説で支那の改造は外國の方に頼るの外途なからむ。「ソヴェート聯邦と烏梁海及外蒙古との關係について」(大竹博吉、東洋)探れば聯邦の一行政區劃として既に名に於て併合せられ居るを見るのである。「曹錕憲法の批評一班」(及川恒忠、支那研究)として民國十二年十月十日發布のものは國權章と地方制度章とを除けば、大體に於て天壇草案の規定を襲用増刪したもので改善の迹は存し形

式或は原則的矛盾の往々に存するは能ふ限り支那固有の政治傳説に適合するを圖りしが爲ならむと思ふ。支那の共和は帝政の遺物(矢野仁一、外交時報)にしてその領土觀念は依然として實際支配を要せざる世界帝國的領土を思ひその他法律や條約觀念に於ても清朝時代と些の變化が無い。經濟方面に於ては「支那貨幣制度の進化に就て」(田中忠夫、東亞經濟研究)支那貨幣が政府の保護干渉によりて爲りたるにあらで社會的制度たりしものが國家的制度となり地方的のものが全國的となり單種貨幣制度が複種貨幣制度となりしことを謂へる「大學に見はれたる經濟思想」(田島錦治、經濟論叢)が格物致知を擴張して稼穡賣買の實務に最善の努力を爲すを是認し、絮矩の道が治者被治者、雇主雇人との關係を認め有形的貨財の上に善親仁なる無形的財寶を教へたるを指摘せる、中庸に見はれたる經濟思想(同人、同誌)が歐洲學者の論争せる自然法則に對し古今を通じて謬らず中外に施して戻らざる不偏不易の一般原理を下し同じく相對原理に對して時に中る損益變改説を下せるが如き注意すべきで

ある。縣以上の都城外に發達せし「唐宋の草市」(加藤繁、史學雜誌)は秣市に起源し次第に發達して町となり酒肆客店も楯比せしものなれば蓋し都市發達の一過程なりと見るべく、同居共財の古風に起源せる「唐宋時代の家族共產制」(中田薫、國家學會雜誌)に對しその法律的構造を説明せるも興味がある。若しそれ「唐宋時代に於ける金銀の研究」(加藤繁、東洋文庫論叢第六)に至つては戰國秦漢の間上流階級の貨幣として使用せられ魏晉以後一旦衰へ南北朝中期より再勃興し唐代には私經濟としては賄賂支拂に公經濟としては納稅用にも用ひられた金が宋に至りて一層發達し清の康熙代に盛に海外に流出せし始末、唐宋時代に金より數等盛に様々の用途に使用せられたる銀が金と共に需要の増加をきたせしは都市商業の發達客商の増加奢侈生活金銀器飾の流行庶民生活の向上錢の不足と紙幣の不信用に原因するを闡明し、露人の侵略に刺戟せられて最近二百年間に三期の階段を爲して開發せられた一黑龍江省呼蘭平野の開發に就きて「有高巖、支那學論叢」官屯期に民墾が盛となり咸豐同治の間に封

禁を弛め漢人を招徠して開墾を行ひ呼蘭城を中心として東は巴彥蘇々北は北園林子方面に發展し露人の覬覦を防ぐと共に兵官の俸餉の一半を支持し得るに至りしを説ける、「支那國民經濟の特質」(作田莊一、支那研究)はロシヤに反對にして實質に於て自然經濟を謂ふも差支無き幼稚なるものにしてこれ地物的環境や四圍の民族との關係社會生活狀態及び政治が之を發展せしむる必要を來たさざりしことを論ぜる、法定利率ある「支那の利息制限法に就て」(田中忠夫、東亞經濟研究)實際は高利が行はれて印子錢轉子錢鞭子錢等の存するを指摘せるは「歐洲經濟學文獻上の支那」(伊藤久秋、商業と經濟)が初は營利心の目的として歐人の興味を惹きしものが後に人口問題が中心となりて注意せらるゝに至りし經緯を謂へると共に好文字である。通商交通史に於ては先づ「東西文化の流通」(孔子教の西漸(後藤末雄 思想)がある、之は利瑪竇以來の科學文明の東漸に對し支那精神文明の西漸せることを論じて、イントルセツタ、クープレエ兩師が大學中庸論語をラテン譯して一六八七年に巴里にて出版せし以

來ル・コント師が孔子教を極東の哲學を稱したるなき歐洲の先進たる佛國の智識階級に東洋文明の浸潤したることを説けるは「佛國耶穌會士の支那渡來事情」(同人、東洋學報)を述べ、一五三一年 Le Sie de Valois がフランシス一世の命にて明の世宗に來謁して以來一六八七年 Le Comte, Gabilon, Bouvet 等が寧波に來着して康熙帝に謁見するまでの事情を謂へるに相對的姉妹篇である。「英吉利の日支初期貿易關係」(矢野仁一、東亞經濟研究)は支那關係は一六三六年に初まり日本關係は更に二十三四年古くして第八回目的セーリスの遠征隊の來東が初なるを論じ且つ支那商人を仲介すれば支那との貿易の許可が得られ日本とのそれも支那品を以てするの有利なることが一六一六年のコックスの書簡に明なるを謂ふ。露支、英支關係の起つて以來「支那に生じた諸外國關係の影響」(同人、外交時報)の結果は外國の獨立、支那の國境、對等の實際貿易、外國宣教師の支那内地布教を認め支那人自らその政治的文化的勢力を否定せざるべからざるに至つた歴史地理の研究には「西域史」(中村久四郎、東洋史講座)

は漢代西域諸國の位置の考定より西域植物輸入問題に及び、「條支國考」(白鳥庫吉、支那學論叢)は「Tars, Euphrates 下流域の Mesene 國なり」と謂ふ故 Chavannes 博士の説を支持し、その理由として後漢書所記の該記載が Pliny の Mesene 國城 Sasini Chaux の記載と合致するを挙げ條支の音は Arabia 語の Gezie の對音なりと斷じて居る。「大唐西域記に記せる東南印度諸國の研究」(高桑駒吉)は就摩栗底國以下秣羅矩吒國に至る十國の位置を考定し「西遼都城虎思轡耳朶考」(王國維、支那學論叢)は之を突厥名にせば八喇沙衮なれば唐書地理志の裴羅將軍城に當るべきを論じてある。宗教問題に於ては、「李太白樂府の景教的解釋」(中村久四郎、史學雜誌)として太白集卷三の樂府三十首中の一なる上雲樂に異國情趣溢れたるは肅宗の至德年代に景教徒が獅子鳳凰を獻じ唐廷にて朝歌儀式を行ひしことを詠せるものと觀「佛教に於ける輪廻説の起原」(甲斐實行、宗教研究)は巴里語の尼柯耶漢譯の阿含經に説かるゝが最古にして神祕哲學の兩説あり「南洋に於ける佛教の跡」(宇野圓空、東方佛教)

「佛教天文學」(小野玄妙、現代佛教)秣羅矩吒國及布咀落迦山考」(高桑駒吉、觀想)「支那禪流の史的的小觀」(栗山泰音、大乘禪)などいろいろの中にも「佛教に於ける神變説に就いて」(禿氏祐祥、宗教研究)は超自然行爲を神變と稱するの耶蘇教の奇蹟に類する所あるを指摘せる「佛陀時代の有神論」(羽溪了諦、同誌)がケーニヤ派ブージャサネヤ派ミ反吠陀主義のムンダ派ゴータマ派ビツバラダ派との間に争はれたるを謂へるは「印度哲學史上の靈的存

在に就て」(神林隆淨、哲學雜誌)肯定説のウパニシャトと否定説の佛陀の教義とを論述し佛陀の無我説が未だ決定的確説ならざるを謂へると共に興味深い。「信行の三階教團」(無盡藏に就いて)「塚本善隆、宗教研究」は三階教徒が異端視さるゝ所以を武徳中より化度寺に無盡藏が設けられ之が僧侶、慧了の力により發達し開元十三年に除かしめられたる所以を叙し「智顛及善導の觀經疏に就いて」(足利宣正、龍谷大學論叢)天台疏は智者大師の口述、辛安の編纂にて疑點尠きも善導疏は歴史の産物たるの疑深きことを考證し「現代支那の佛教研究一斑」(佐藤泰俊、

宗教研究)は武昌の佛教院大學南京の法相大學、揚州の華嚴大學の實況を紹介し「近東に於ける回教民族の動亂に就いて」(赤松智城、同誌)一瞥し宗教的文化史的意義を論じて居る。言語文字校勘方面にては「支那文字の研究」(中村不折、東洋史講座)「焉支支那連」(藤田豊八、支那學論叢)あり、後者は祁連を天山とする顔師古の説を駁し焉支燕支烟支燕脂を Turk 語の Asy の對音とし祁連を Sein の音とする新説を吐いて居る。「龍籠手鑑」に引ける玉篇(岡井慎吾、藝文)が古逸叢書本所見の顧氏の原本にも將た孫強の增字本にも非ざる他の異本なること、紇の全稱は纛轄にして軍隊の性質任務の上より邊境の義を有する蒙古語 *ᠰᠢᠳᠤ* が原義ならむと謂ふ「紇軍に就いての疑」(鳥山喜一、史學雜誌)「問題の一語泪と泪」(藤田豊八、同誌)につき紇を女真語 *ᠴᠣᠬᠠ* を漢人の誤寫せしもの、泪は彫にして彫琢刮摩の意ありと謂ふ説は「敦煌本文心雕龍校勘記」(鈴木虎雄、支那學論叢)と共に注意に値する。風俗史方面にも、「亞細亞北族の辮髮に就いて」(白鳥庫吉、史學雜誌)と題する雄篇がある。ツングース族に

しては肅慎靺鞨女真滿洲、蒙古族としては匈奴拓跋蠕蠕室韋蒙古、トルコ族としては鐵勒突厥諸族に皆此の風あるを文獻的に考證し、その起原を匈奴に在りし斷じて居る「蒙古ブリヤードの俚諺に就て」(金田常三郎、東洋)諷喻的表現を愛する風を窺ひ得るを例證したのもある。思想史方面に於ては、殷周の感生傳説の解釋(白鳥清、東洋學報)を試み支那古代人間には天に請子すれば天子を授けらるゝてふ信仰あれば、感生傳説は天子が人民を治するに當り一般人民の抱懐せる此の信仰を利用して己の尊嚴を高からしめむとの念より己の始祖の出生を天又は日に關係せしめたるものなるべしとし「經學史上に於ける穀梁家の地位」(本田成之、支那學論叢)は穀梁に法家的色彩あるは此書の秦漢の交に成りしことを自證せるもので正義の觀念顯著なる所確かに荀子よりも一步を進めし法家的要素あるを認め得らるれば蓋し秦漢の時代思想を加味せしめて漢の景帝武帝時代に成立せしものならむと斷じ、經學の源流(同人、支那學)を討ねれば古は儒墨莊老屈原の書、論語、孟子詩書をも皆經と稱したるを見れば

儒家の經の稱呼は荀子勸學篇莊子天運篇以後に起り、孔子が古來の史官所藏の文書を集大成せし時には未だ經學を命名せざりしも後世より之を見れば實に經學の成立に外ならず而も孔子の所謂斯文は決して漢書藝文志の謂ふが如き司徒の官の繼承に非ざるべく考へられる。人情に基きて之を盡さしむる様に外面的形式を定め受禮者の幸福を顧慮し時代に適應する様制定して而も始を忘れず往來あらしむるを本旨とせるが「朱子の禮論に關する一考察」(後藤俊瑞、哲學研究)の結果である。宇宙常存萬古不易人類社會の安寧秩序を維持する道の意を那波魯堂の學問源流の説によりて説明し大禹謨論語堯曰篇孟子韓愈二程朱子黃勉齋陳北溪真西山薛敬軒胡敬齋林羅山の道統説を述べて「道統傳」(高瀬武次郎、支那學論叢統圖を製したのもある。孔子が富を輕蔑せざりしは論語に徴して明かだ商業を輕んぜざりしは大學に徴證すべく子貢に貧殖の才秀でたることより孔子の集大成したる儒教に於ては決して商業を輕蔑せざることを謂へる「儒教と商業」(中村久四郎、東亞經濟研究)もある。若しそれ特種問題の研究

究に至つては百花妍を競ひその量に於ても最も多く考覈精を争ひその質に於ても大に勝れたるものあり「老子原始」(武内義雄)はその老子傳研究に於て發見なる見解を發し史記老子傳の大部分を疑ひ老子の年世を周の威烈王より顯王の初年に擬したる點最も注意に値すべく莊子攷列子窅詞子思子曲禮攷會子攷等十一篇の論文と共に有益なる研究である。「天文學上より見たる支那上代文化」(新城新藏、思想)「東洋天文學史大綱」(同人、支那學論叢)「支那天文學の成立について」(飯島忠夫、東洋學報)は何れも姉妹關係篇にして前者は農業文明の初期なる堯舜時代以來前漢の太初の曆法制定まで支那天文曆法學發達の歴々指點し得られ春秋經が眞價に富み周代に土圭の使用冬至正月説の成立せることを論じ、中者は太古より漢の太初まで外國曆法の支那に輸入せられた形跡無きことを證明してその證據としては支那カルヂヤ埃及各々獨立的に異なる辰を用ふることを、周初支那にて考案せられたる二十八宿説が印度波斯アラビアに傳播せし痕迹明かなること、太初曆にカルヂヤのサロスミ異なる蝕の周期計算

法が採用されあること、甘石星經ミトレミ恒星表ミこに何等聯絡無きことこの諸項を擧げて居り、後者は春秋經昭公十七年の日蝕はサロスの智識を以て後世挿入せられたるものなるかを疑ひ呂氏春秋序意篇の維秦八年歲在涿灘の文は抹殺せざるべからず左傳の陳滅亡の年の記事は劉歆以後の改作に係るものと斷じて新城博士ミの大論戰は更に華々しさを加へた。「古代印度人ミカスト」(明石惠達、龍谷大學論叢)は印度に於ける世襲的身分及び職業等を基礎として立てられた社會的地位の區劃を表はせるCasteはポルトガル人が印度の嚴密なる階級に命名した名で梵語ではVarṇaに當りリグベータ時代に起原する征服者ミ被征服者ミを區別する語である。先秦時代の戎狄蠻夷の差別的觀念は人種的のものに非ずして文化程度より由來せりこし逸周書王會解所見の俞人青邱央林禺氏ト盧大夏等の根據地を探求し此の華夷の觀念は春秋戰國時代に周室の封建して高級文化生活を營みし大國が附庸ミせし小國に對して考へたる王會當時の記錄を戰國時代の東周の史家が潤色誇張して遠人を戎狄視するに至りしこ

こを謂へる「北支那先秦蕃族考」(小川琢治、支那學論叢)は實に一大長編である。支那人が塞外人を胡人ミ總稱する緣由に關する疑(那波利貞、同書)も之ミ關聯せる問題であるが、胡は春秋以前の蒲衣國諸虞國の蒲・虞ミ同音にして而して此等諸國は匈奴人の部落ミ思はるれば胡ミは後に匈奴の二字を以て表はさるべきHingganに類する族民の略稱ならむこを胡奴車陶衍之戎等の事實より考證し胡人は正しくは胡奴人、東胡人は正しくは東胡奴人ならむこを謂つて居る。意志の鞏固ミ情愛の豊富ミ修養の結果倫理の規範に適ふ理想の境地に進み得たるミが「孔子の盛徳」(宇野哲人、斯文)にして、而も「孔夫子及び其の家系に就きての二三の考察」(那波利貞、歷史ミ地理)を試むる時は夫子の家は殷人に出でて魯に生活せし爲意志鞏固の傳統上に古拙謹飭の性質が傳統し、生母顏氏の家が魯の名族にして妾ミして孔家には入る能はず自然夫子は野合の子ミ爲りしも顏氏の家の明晰なる頭腦の遺傳が夫子に傳統せられたるものあること、並に鯉の名が決して昭公の贈物なる鯉魚に因まれざりしならむ

こゝを提議せるに關聯ある問題である。「支那古代の長城に就いて」(橋本増吉、史學)その起原を史記趙世家の成侯六年の記載を最古とし周の封建制度に求め秦以前のものも多少甄石を利用したるかも知れぬと謂ふは「東洋史上に於ける南北の對立」(白鳥庫吉、東洋史講座)を論じて今日の東洋史を一貫する大勢がその根本に於て南北二大勢力の對立より緣由せるを時代順に説明せるに共に好個の見解である。青錢學士張蔭の傳記を研究し遊仙窟、龍筋鳳髓判、朝野僉載、耳目記の著述を述べ遊仙窟と會眞記の間に構想の類似點無きことを謂へる「張文成」(坂本蝨舟、中央史壇)我が平安朝に存する變態漢字と五岳圖及四山圖よりなる鳥瞰圖式(Chavannes Parker)の引用せる表象的徽號のものとの二種の中乙者が唐以後に起り宋元間に普及せしことを考證せる「五嶽眞形圖に就いて」(井上以智爲、支那學論叢)の研究、番寓が外國通商に關する「支那港灣小史」(藤田豐八、東洋史講座)の研究支那鐵器時代より樂浪遺品に至る「文獻之遺物との相互補助」(原田淑人、同書)を説けるあり。「隋唐時代に支那

に來住した西域人に就て」(桑原隲藏、支那學論叢)異族の中原移住事情と姓氏の混亂を敘論し、波斯人としては卑路斯、泥涅師、阿羅憐、石處温、大食人として李彦昇諸猶太教徒、印度人として僧侶、矩摩羅、加葉、瞿曇の三天文の家、那羅邇婆娑、盧伽逸多等の醫者、骨儀、羅好心、大秦人ならむ秦鳴鶴、ボカラ人李抱眞、李抱玉、李國臣、駱元光、舞工安叱奴、安金藏、サマルカンド人康詢、康阿駄、康鹽典、康拂耽廷、康謙、畫工康薩陀、樂工康寬崙、康日知一族、安祿山、マイマルグ人樂工米嘉榮、米和、米都知、醫者米遂、軍人米暨、米志誠、文人米諾、米友仁、キシユ人史懷恩、クシヤニア人何灌仁何稠、僧伽大師、タシユケンド人石演芬、マルブ人の末姓、ウテン人尉遲乙僧、尉遲勝、カシユガル人裴玠、龜茲人白孝德等が各々外族出自なるを考證し、「玻璃鏡の起源」(原田淑人、人類學雜誌)を唐の張説の梁四公記に據りて唐代に今のカンボヂヤ國より輸入せられたるに在りし且つ拾遺記の火齊が玻璃と關係あらむを謂ひ、「唐宋時代の旗亭酒樓」(那波利貞、歴史と地理)につき酒樓の

名が酒旗に緣由し唐代には外國酒外國音樂が流行し料理にも西域印度系のもの行はれ、北宋に入り平民文化の盛なるや汴に分茶、川飯、南食、瓠羹、素分茶の店々發生し南宋となりて人情茶坊、花茶坊、妓女の發達あり官當酒樓の官妓の有様、清涼飲料の行はれたるを謂へる、「五臺山史の一節」(井上以智爲、同誌)として北齊書白建傳に初見する五臺山名の由來なる五峰五臺を論じ北魏以來佛教に關聯して五臺山地方の開發せられたる事情に隋代に清涼山の別名發生せし原因を討ねたる、「五代宋初に於ける安南の土豪吳氏に就いて」(杉本直治郎、支那學論叢)安南志略五代史記の本文研究より着手して吳昌濂吳昌文の兄弟ならざることを證して三代説を是とし吳權楊三哥、吳昌巖、吳昌文の在位年間を考定したる、「交趾支那名稱起原考」(向井章、支那研究)として一五〇二年ゼノバ人アルベルト・カンテイノの地圖に支那交趾と見ゆるを最古と認めその名稱が時代的に地理的範圍を異にするを考證せる「成吉思汗の挽歌に就いて」(鴛淵一、史林)漢譯の蒙古源流ミ喀喇沁王府所藏の異本 Schmidt の獨譯本、

蒙古本の四種を比較せる、又康熙時代西藏遠征の始末ミ英吉利との交渉前に於ける西藏の状態を論ずる「近代西藏史研究」(矢野仁一、東洋史講座)何れも一讀せざるべからず、「支那に於ける鴉片問題の起原を論ず」(同人、經濟論叢)れは雍正七年の禁止令發布後も藥材としては販賣も許されたるも雍正二年頃より起りし吸飲の風潛かに盛となり先づ道德衛生の問題として重視せられ初め、道光初年の程含章の論洋書にて銀流出が鴉片に原因するところが指摘せられて稍經濟的意味をも含むに至りしも基調に依然として道德的考慮に在りしものである。「福建省内或る地方の一妻多夫制に就て」(大田一穂、東亞經濟研究)女子が賃貸借の物品視せらるゝを説き「支那の特殊民族に就て」(田中零堂、東洋)山西の樂戸浙江の九姓漁戶情民畚民徽州の伴當寧國の世僕蘇州の丐戸廣東の簪戸を指摘したのがある。支那人の歴史記述は殷周革命以後に起りて諷誦ミ記録ミに表はれ尙書五誥の如きが盛周のまゝを傳ふるは諷誦せしものを宣王時代に記述したに依ることを「支那歴史記述起源考」(丹羽正義、支那學論叢)宋元

時代に著しき空前的發達を遂けたる「支那數學の特色」(二上義夫、東洋學報)を觀るにアラビア數學の影響は疑はしく又數學者が専門家ならず、積算太一算兩儀算以下珠算に至る十三算法、天元術、四元術、大衍求一術等を見て我が國の數學に劣らざるを知る。支那陶磁器に表はれたる西域文化(小村俊夫、東亞經濟研究)は吳須に西域陶器を摸せし青花あり北支那の軟火釉系のもは埃及硝子と關係ある曹達青釉を用ひ、柴窑均窑の天青色は西域傳來の酸化焰燒成の銅呈色灰釉なるべく、汝窑官窑も西系青瓷の摸仿なれば新疆出土器に西系のエンゴトベを施せるあるを見る。「東洋文化の研究」(松本文三郎)は佛教考古、藝術に關するものにして遂に鑿、琉璃考ボンベの壁畫印度の佛像と美の思想を論じ、「支那香料の研究」(稻葉若吉、東亞經濟研究)は香の全國的嗜慾の支那民族の西南發展に基因するこより博山爐が海外傳來のものなるを説き、漢代以來南海より香料を收め、唐代より課税し、宋代に盛に嗜好せられたる經緯を述べ「山井鼎と七經孟子考文補遺」(狩野直喜、支那學論叢)が汗鵬の手

によりて長崎より鮑廷博の手に入りしこも日本碎語に見ゆる通にして鮑氏入手本が吳審に供覽せられ阮元が更に之を觀て清朝の校勘學考證學の勃興する原因を爲せるは邦人學者の誇とするに足るであらう。工藝、美術、方面にて畫は「支那畫の研究」(梅澤和軒、東洋史講座)なる概説を外にしては「大乘佛教美術の起原及び其の發達體系」(小野玄妙、史學雜誌)をバーミヤーンの像を例として見ても大月氏より一は中亞西藏を経て支那に入り他は南方印度に逆流したるこを認むべく「支那繪畫史講話」(内藤虎次郎、佛教美術)は上古より中古に至る趨勢が説かれ殊に顧愷之の女子箴の製作年代をその詞畫の書風より南北朝末期ならむと論じ「東洋の想像畫」(吉田長次郎、國華)は傳統的動物畫の線描に特異なる發展ありて氣韻を貴ぶ東洋人に之が好まれたるを知るべく「法華經美術」(松本榮一、同誌)は唐代に流行せし變相畫の中に法華變相として行はれ而して變相畫とは記述の事柄を辿つてそれに當嵌るべき圖の一段宛を順に細かく竝べ立てそれを一の大なる圖に仕上げしものにして中心は常に變轉移動せ

るを特色とする。ルーブル博物館所蔵の「敦煌出騎馬人物圖に就て」(二千里、國華)我平安朝以前の草花、正倉院樹下美人圖の樹木に通ずる所あるを比較し「中央亞細亞出土の唐朝風俗畫」(澤村專太郎、佛教美術)はスタンイン氏の喀喇和卓將來の樹下美人圖及京都山中氏所蔵の吐魯蕃出土の樹下美人圖に印度波斯の熱帶的風土が表はれ居るを謂へるは面白い。「宋代畫論畫史の書」(瀧精一、國華)の郭若虛の氣韻非師説は心印説にして人格主義、郭熙の林泉高致は自然研究主義、その三遠説は宋朝山水畫家の理想の表現、韓拙の山水純全集は版刻結の三病の上に癡病を創設せしものなるに説及した。彫刻には「東洋の彫刻」(關野貞、中央史壇)を汎論し漢代が支那固有の發達、六朝時代が西域の影響、唐宋が中印度の影響元以降が西藏の影響を受けし時代なるを謂ひ、建築には「支那建築史」(伊東忠太、東洋史講座)は古代より漢代までの諸建築を概説し、「少林寺の古塔群」(澤村專太郎、佛教美術)は嵩山の少林寺に残存する唐以來清朝に至る正確なる年記あれば各種の塔の様式研究上好箇の遺品たるものである。

音樂には「樂府の研究」(倉石武四郎、支那學論叢)あり、前漢末まで雅樂を壓倒せし所謂鄭聲は西域樂の短笛鏡歌に由來し之が黃門鼓吹並行鼓吹の二系統に發達して雅樂となり軍樂の本色を失ひて享宴曲横吹となりし經緯を論ぜるは「宋樂と朝鮮樂との關係」(内藤虎次郎、支那學)を論じて李漢が朝鮮の唐樂が宋樂に淵源する説を唱ふるを賞揚し高麗史樂志の唐樂四十三曲をりて宋の詞曲に比すれば三十一種相通じ樂學軌節所見の小曲も宋詞曲と合致するもの甚だ多きのみならず、演奏の次第も碧鷄漫志夢溪筆談夢梁錄の記載と合すれば宋樂が宋元の間至高麗に輸入せられたる明なれば朝鮮樂を採りて支那に亡べる宋樂を採り得るを論述せるも時代的に關聯せる二論文である。乾隆末期より崑曲が衰へ西秦南七の兩曲漸く盛となり咸豐同治に至りて皮黃調全盛となりし「崑曲より皮黃調への推移」(青木正兒、支那學論叢)につき秦腔の魏長生徽班の高朗亭の劇界革命を詳論するもある。「The Evolution of Peking Opera」(Paul Pelliot 支那學論叢)は篋篋が元史所見の火不思なることを論證し「洋樂

に於ける東洋色としての西班牙(服部龍太郎、東洋)は浪漫主義の勃興後西班牙音樂に東洋色の濃厚になりしを謂ひ「東西古甸金石展觀列品中の二三に就きて」(石崎達二、佛教研究)批評し太昌元年が永熙元年と同年なるを考證した。史料研究は甚だ盛である。「北堂書鈔の舜典孔傳」(石濱純太郎、支那學論叢)は王肅の注補續本にして「儒學史資料」として見たる兩戴記(武内義雄、同書)は刪略編纂の際今文資料をも攝取せる疑あり、頃者發見の録印の文が史料の缺を補ひ誤を正す好資料で元魏に緣由すむ謂はるゝ經孫新孫古孫牟孫室孫叔孫氏が既に録印に見えて虜姓に非ざるを知るが如き「録印姓氏徵序」(羅振玉、同書)の如き、臨清の徐梧生司業家の遺書たる黃堯圃手校本によりて通行本の脱文を指摘するこゝ十三條の「校漢紀書後」(傅增湘、同書)の如きも貴重なるもので、「佛教傳來に關する魏略の本文に就いて」(藤田豊八、史學雜誌)按ずるに復立が復豆、臨蒲塞が偏蒲塞の譌誤にてそれへ Buddha, Upanka に當へべく、晨門が桑門 Sravana の譌かそれば臨倪國は Lumbini なりこ謂ふべし

ビー氏の説を裏書し臨倪は臨毘の譌なるこを考へ得る蓋し晉以後道佛の徒相排擠し魏略の文が故意に更改せられたるの證左ならむと思ふ。「魏略の本文につきて補遺」(同人、同誌)は史記大宛傳の正義の髮が髻の譌誤なるを謂ふ「玄奘の著譯書に就いて」(松本文三郎、藝文)翻譯經典の部數を慈恩傳、玄奘行狀劉剎塔塔銘內典論開元錄貞元錄等の記載より論定し會宗論三千頌老子及起信論の梵譯問題に及び、梵譯老子は印度に傳らず、起信論の梵譯は誤傳ならむを謂へるは「起信論の支那選述説に就いて」(同人、宗教研究)と併せ見るべく「敦煌遺書」(ペリオ・羽田博士共編、單行)は寫眞版にては慧超往五天竺國傳殘卷、釋迦牟尼如來像法滅盡之記、七曜曆日、漢蕃對音千字文殘卷を活字本には後漢乾祐二年沙州地志殘卷、張氏勳德記殘卷、後唐長興四年五年曹議金疏、後晋天福七年曹元深疏、陰善雄羅盈達闍海員張懷慶銘讚、常樂副史田員宗啓、燉煌名族志殘卷、小說明妃傳殘卷、法成譯薩婆多宗五事論を收めて各々羽田博士の解説がある。燉煌本仁王般若實相論に就て「妻木直良、宗教研究」燉煌古

書雜考」(石濱純太郎、東洋學報)「龍谷大學所藏熾煌遺書略解説」(禿氏祐祥、龍谷大學論叢)「熾煌寫經の研究補遺」(高柳恒榮、佛教研究)等熾煌物の研究中にも「景教經典序聽迷詩所經に就いて」(羽田亨、支那學論叢)は高橋博士所藏の本書の中唐以前の書寫本を斷し迷詩所は迷詩詞の譌にしてメシアの對音、序聽は *Evangelium* にてイエスキオへ得られ、唐初東來の景士が教義宣傳の爲熟達せざる漢語の知識を以て忠孝二道に卽して神に信事することを説きし好史料を觀たるは有益なる文字である。「金史世紀の研究」(池内宏、滿鮮地理歴史研究報告第拾壹)の結果は阿勒楚喀附近を本據せし完顔部の威力が世祖より康宗に至る四主の間に滿洲及高麗の長城外の女直諸部族に及び阿骨打以前の世紀の文は始祖以下十帝實錄を原據とし太祖本紀以下は太祖實錄等歷代の實錄に原據せしを知る。「宋版大藏經の零本」(藤堂祐範、歴史と地理)「西藏大藏經目錄」(櫻井文鏡、佛教研究)「琴趣外篇に就て」(倉石武四郎、支那學)の各研究「遼陽喇嘛墳碑文の解説」(鴛淵一支那學論叢)を爲して天聰四年順治十五年の幹祿打兒罕

囊素の碑を讀み滿洲族間に早く喇嘛教の信仰ありし爲清太祖時代に此の高僧を蒙古より迎へて教化に従事せしめたるならむかを提唱せるもの「新に發見されたカトリック教の宗論關係の二史料」(桑原隲藏、史林)は清室善後委員會が康熙硃批舊檔中より發見せし教王禁約を康熙諭旨を紹介解説し「讀書漫錄」(羽田亨、史林)は摩尼光佛教法儀略、パトラーキ語の偈讚藤田博士の焉支と祁連の研究の批評、王國維氏の韃靼考の批評を綴り「千五百九十年マカオに於て印刷せられたる一書に關する解題」(笠井鎮夫、思想)が Alexandros Valignani の命にて日本語學習用のものなるを闡明す「ライブニッツの支那の最近事について」(坂口昂、支那學論叢)は蘇霖の報告、南懷仁の天文書拔書、閔明我の書簡以下康熙帝の傳記あるを述べた。批評を紹介には「カーター氏著支那に於ける印刷の起原」(桑原隲藏、史林)を批評し量質共に出色の好著なれども國史志の本文批判を缺き其他原本の考覈を忽せにせる點多く日本人の著述を參考すること不足せるを難じ併せて藤田市村兩博士神田學士の新論に説及し「見聞漫

録(石濱純太郎、支那學)は趙元任錢玄同二氏の國語字母より羅馬字母への改革運動なごを紹介してある。紀行には廣東の懷聖寺、泉州の清淨寺靈山、西安の清真寺杭州の眞教寺蘇州の瑞凝禮拜寺、鎮江の清真寺、南京の淨覺寺、濟南の南大寺、北大寺西寺、北京牛街三里河の兩清真寺なごの「禮拜寺巡り」(桑田六郎、東洋學報)「游支日件録」(武藤長平、歴史地理)「支那視察記」(北支視察所感)〔以上古橋實見、國學院雜誌〕なごがある。〔那波〕

西洋史 先づ著書の方面を見るに、「眞人基督」(三並良)は現代の聖書研究による眞人キリストの復活を説明しキリストの眞相を示さんとするもの、「人間として見たる使徒パウロ」(賀川豊彦)はキリスト教の世界的布教とその教義の發展に大なる功績をなしたパウロに對する著者の眞劍にして熱烈なる論述であり「原始及古代の文化」(二氏義良)はアルス社の世界文化史大系の第一巻として出でしもの、古代東方諸國の興亡よりギリシヤ、ローマ時代に互つて興味深き筆をもつて叙述し加ふるに豊富な挿畫によつて讀者の感興を大ならしめて居り一般人士

の好讀物とすべきであらう。「永久の都羅馬」(大類伸)は著者のローマ滞在十箇月間の思出あつてその豊富なる學識から湧き出でた永遠の都への懐古の情趣は津々盡きざるものがある。「近代ロシア社會史研究」(齋治隆)は十九世紀初頭より最近に至るまでのロシアの社會史にして史料正確にして叙述亦明決であり「經濟史研究」(野村兼太郎)は事、英國經濟史、近世商業史、寺院經濟にかゝり、この種の研究書の少き吾國に於ては重要な著述とすべきであらう。「植民及植民政策」(矢内原忠雄)は十九世末紀より二十世紀に互る帝國主義時代に於て最も重大なる意義を有する植民問題の社會的、經濟的、政治的諸關係の特色を説明せるもの、「世界の變遷を見る」(幣原坦)は世界大戰後に於ける世界の變動の中に幾多の教訓を見出さんとするもの、その論義には傾聽に値すべきもの少なくない。最後に「通俗世界全史」(坪内逍遙監修、中島孤島、高須梅溪、薄田斬雲、松本雲舟)は世界史の主要なる智識を題目の示す如く容易に且つ興味深く讀み得るやうに叙述せしもの、古代列國史以下二十世紀に至る全

十七卷更に地圖索引の一巻を附して居る。一般歴史愛好家の好參考書である。

次に雜誌の論文の方面を見るに、古代に關するものでは「フェニキア語(又はカナニ語)の Alphabet の起源及びモーゼの Inscription」(中原與茂九郎、史林)は Sir Rindersbachie 博士がシナイ半島の一鑛山にて十一個の不可解文字にて彫刻されたる碑文を發見し Gardiner 博士はこのシナイ碑文が諸國語のアルファベットの起源を考へられるフェニキア語のアルファベットの古き時代の形を示すものなりと斷じ、Grime 博士は更にこの碑文はモーゼ自身彫刻せしものなりとして居る故若しこの説にして正しとせばモーゼが十誡を刻した神の書は即ちシナイ碑文なりと解し得るをなし「バビロニア宗教に於る一神教的傾向に就て」(同人、歴史と地理)は一神教を特質とするイスラエル教も古代に於ては多神教的傾向を有しそれが豫言者の大なる努力によつて一神教にまで發展したのであるが、バビロニア宗教はこれに反しアスールバニバル時代に於ては一神教的傾向を現はして居りながらそれが一神教にまで發展せず依然として多神教に止まつた

のは偉大なる精神力を有する實際的指導者が存在せなかつた爲であるをなし「ルエクルゴス傳説とその文化的意義」(原隨園、史林)はこの紀元前九世紀に出た立法家によつてスバルタの政治組織、社會制度が整頓されたこの傳説に對し、その人物の實在及び傳説の形式に對する疑問を述べ、所謂ルエクルゴス憲法の内容を種々の方面より検討して、かゝる憲法の制定は決して一個人の名に歸すべき業績に非ず、その傳説は古來スバルタにて氏族神として信仰せらるゝルエクルゴスの名に假託せられし軍國的、貴族的、復古的改革の理想案たるものなりと斷り次いでこの傳説が如何なる環境の下に成立せしかを述べ、この傳説がその後ローマ時代に至るまで社會改革運動の理想として憧憬されしこと、及びこの傳説に於ける制度そのもの、中にはギリシア民族が都市生活に入る前の部族生活時代の原始生活様式を示すものあること、これルエクルゴス傳説の文化史的意義を有する所以なりとして居る。次に中世に關するものでは「ゲルマン法に於ける夫婦財産關係」(近藤英吉、法學論叢)は、獨逸の Schröder

の研究を基として中世ゲルマン法（フランク時代を包含す）に於ける夫婦財産關係が如何なる過程を経て變遷せしかを述べしものであり、「基督教北歐傳播の發端」(高市慶雄、史學雜誌)は北歐に於ける基督教傳播の淵源は聖ボニファーチウスの獨逸傳道にこれを求め得るが其後一世紀を経て大僧正聖アンスガルの活動によつてデンマーク、スエーデンに於ける基督教移植が行はれたりまなし、「ローマ法王の宗教政治を論ず」(佐藤謙讓、佛教学研究、法學論叢)は先づ國家教會合一制度の意義を明かにし次いでこの國家教會合一思想の發展を論じコンスタンチン大帝の時代にては未だローマ帝國にてキリスト教の國教制度行はれたりま斷定し得ざるもテオドシウス大帝にて始めて國家教會の合一なることを帝國法律上宣せられたが、この合一制度に於ては國家が教會に對して支配するか教會が國家を支配するかの二つの運命を有し、東ローマ帝國にては國家の教會絕對支配となり西歐にてはカール大帝の時代オット大帝の時代ミ云ふ二個の中斷ありしにせよ結局に於ては教會が完全に國家を支配する形式を

取り遂にインノセント三世の時代に至りてローマ法王の宗教政治はその最高點に達せりまなす、次いで中世に於る教國制度の内容を述べ、聖アウグスチヌス及びインドル僞說教令がその思想背景となりしものなりまなしこのローマ法王の宗教政治は十四世紀頃より衰へ近代國家の出現と共に各國は法王權より全く脱した、しかも尙ほ法王は巧みに説を樹て、中世の教國制度の保有に努力せりまなす。「ザクセン家獨逸皇帝ミビザンツ、サラセンミの關係」(安藤俊雄、歴史と地理)はローマ帝國に完成せし世界統治の理想がカール大帝によつて再現され更にオット大帝によつて神聖ローマ帝國の創立まなつたが、このオットによつて確立されたザクセン家獨逸皇帝權がその後如何なる世界史的發展を遂げ、この發展が同時代に於る最高文化を有するビザンツ、サラセンミ如何なる關係を有せしかミ云ふ頗る興味深き文化史的現象を敘述せしものであり、「世界的神政國家の滅亡」(高橋誠一郎、中央公論)は最初は甚だしき迫害を受けたキリスト教がローマ帝國の靈の世界を代表する勢力まなり中世にてはカ

トリツクの統一を以て歐洲を結合し世界的宗教政治を形成したが近世民族的國家が出現し現世的理想が支配的地位に立つ時代となるに及びキリスト教的世界帝國の統一は破壊されしを述べ、「ルネサンスの先驅者コラ、デイ、リエントオ」(大類伸、歴史ミ地理)は十四世紀の半ばローマにて革命を起し自らローマの護民官となり、しかも僅かに七ヶ月にて失敗したりエンツォの事業はその火花線香的行爲より見れば單なる喜劇の如くなれどローマを中心として全伊太利に平和正義の支配を實現せしめんとしたその國民主義的理想に至つてはルネサンスの新時代の先驅者として充分の史的意義を有するものなりとして居る。次に近世、最近世に關するものとしては、「サヴィニイの根本思想」(高柳真三、國家學會雜誌)は十九世紀前半のローマンチック運動の中から現はれ出た、歴史法學派の創始者ささるゝサヴィニイの根本思想を論ぜしものであり「ロバート・オウエンの復活」(本位田祥男、改造)は英國に於ける社會運動史に重要な地位を占むるオウエンの思想が從來は單なる空想的のものなりとして排さ

れて居たが最近彼の思想が大いに認められ英國社會主義の創始者としての彼の位置が確認され來つたことを述べて居る。「米國と佛國革命」(齋藤清太郎、史學雜誌)は米國の輿論は佛大革命に對して同情を持つたが米國政府は自國の利害を考慮して局外中立の方針を固有し歐洲戰爭の渦中に投ずることを避けると共に交戰國のいづれにも親善なる關係を維持して商業的利益を圖らんとした、されば後のモンロー主義の名を以て知らるゝ米國の對外的國是は既に佛革命によつて起つた歐洲戰爭に對する米國政府の態度に現はれて居ることを論じ「一七九六年の伊太利戰役以前に於けるナポレオンの活動」(大村作次郎、歴史ミ地理)は伊太利戰役前に於ける幾度かの不運と失望に會したナポレオンの忍耐的活動を述べしものであり「一八四四年以前の米國政黨史」(恒松安夫、史學)は一八〇〇年以後四四年に至る米國政黨の消長を述べしものであり「五月法令とビスマルク」(長壽吉、史學雜誌)は五月法令起草發布の前後に於てビスマルクは種々の矛盾の間にからまつて頗る困窮したのであつて、かの一八六九

年のモアビット事件に於るが如く舊教同情策を明示して居るが、これは明かに政治的條件附の便宜的性質のもので機會を以てその矛盾を露はし文化鬭争の消極的由來になりしもので、五月法起草に關するビスマルクの無責任に對する辯解は理解し難く法案提出の責任がビスマルクにあることは否定し得ずと論じ「一八七七年の露土戰役前後に於る國際外交」(大村作次郎、歴史と地理)は普佛戰役後ベルリン會議に至る國際外交を述べしもの、「佛蘭西のチュニス占領に就て」(同人、同誌)は三國同盟成立の動因となりしチュニス問題に關する外交關係を最近公表されし史料によつて研究せし W. J. Tauger の論文の紹介である。「東方問題の意義及列國東方政策の史的考察」(松原一雄、國際法外交雜誌)は歐洲近世外交史上に於て最も重要な意義を有する東方問題の意義を論じて、露佛、英、墺、伊、獨、米の諸國の東方政策を各々歴史的に論述せしものであり「農奴解放後に於る露西亞の土地問題」(吉川秀三、經濟論叢)は農奴解放後一九〇六年の農業改革に至る時代のロシアの土地問題を研究せしもので、

農奴解放の經濟的效果は一般農民の立場よりすれば失敗であつて一九〇五年末の全國的內亂の最大原因も亦こゝに存すまなし「露西亞に於る農業改革とその效果」(吉川秀造、同誌)は一九〇六年の農業改革は頗る大規模に行はれしに拘はらず、これが局に當るものが貴族、地主の利害を代表する保守主義者なりし爲、實際上一般農民はこれによつて利益を蒙むること少なく農民に對する土地の缺乏は依然として存し遂に一九一七年の大革命となつたのであると論じて居る。「英米關係の史的考察」(齋藤清太郎、外交時報)は米國獨立後の英米關係を概論して歐洲大陸諸國の新大陸に對する侵略、干渉に對抗する點に於て兩國は利害を等しうせるものなることを論じ「下の關係約と獨逸干渉の動因」(煙山專太郎、同誌)は獨逸外務省發行の外交文書集その他の新史料によつて外交史上 *Ostasiatische Dreibund* と稱せられる三國干渉に於ける獨逸の外交を述べしもの「太平洋及び極東方面に於ける米國發展の段階」(高木八尺、國際法外交雜誌)はこの方面に於ける米國の帝國政策の發展を論ぜしもの、「政治

史の進行より觀たる歐洲國境の新訂（奥平武彦、國家學會雜誌）は國境に關する總括的論議を爲した後、世界大戰によつて惹起された歐洲國境の變動の原因並びにその政治的意義を論じたる詳細なる研究論文である。最後に世界大戰後に關するものでは、その主要なるものを擧ぐれば「ロカルノ條約」及び「中立條約」立作太郎、國際法外交雜誌）はロカルノ條約及び實際上その前身を認め得べき平和議定書との關係に就いて論ぜしもの、「ロカルノ條約は現在の國際聯盟の與ふる所の保證を以て不充分なりとして結ばれしものなり」とし兩者の間の緊密關係を略述せしもの「ロカルノ諸條約管見」（須磨彌吉郎、同誌）はロカルノ條約の全體的、法理的觀察をなし國際聯盟規約及びゼネバ平和議定書に對する關係を述べしものである。

「露土條約の意義」（中平亮、同誌）は一九二五年十二月十七日バリーにて結ばれた露土條約は從來の國際關係殊にロカルノ條約の成立によつて成りしロシアの國際的孤立を救ふものとして大なる意義を有する所以を述べ、一九二六年四月廿六日獨外相ストレーゼマン露大使クレヂンス

キーミの間に調印され將來の歐洲外交界に大なる影響を齎すべき獨露中立條約に關しては、「獨露中立條約と國際聯盟」（奥野七郎、同誌）「獨露條約影響如何」（稻田周之助、同誌）「ロシアより見たる獨露條約」（長谷川文人、同誌）「獨露條約と伊國の飛躍」（高木信威、同誌）があり、一九二六年九月十七日フランスの一寒村トアリに於て佛獨兩外相の間に於ける會見に關しては「トアリ會見ミドウズ案」（佐々木修一郎、同誌）「トアリ會見の一特性」（三島泰雄、同誌）があり「英國外相と伊國首相との會見」（奥野七郎、同誌）はトアリ會見に於ける佛獨協商に對抗するものゝさるゝ九月卅日のヨット・キュルラナ號上に於ける英外相と伊首相との會見の内容を述べ「英伊協定の二方面」（三島泰雄、同誌）は大戦後次第にその度を濃くして來た英伊接近を論ぜしもので、この英伊の接近は大戦後大陸に於ける第一人者となつた佛國に對抗する爲に英國がその協力を伊に求めしこと、軍事上、植民政策上佛對英伊の對抗形勢の存せることによりて成りしもので、この英伊接近に關して伊國の異常なる植民慾と伊國が一方に英

國と結びながら他面にスラブ同盟、アングロ・ザクソン同盟に對抗して汎ラテン同盟を劃しつゝありきの興味ある事實を認め得るを論ず。「罅隙を縫ふドイツ外交」(中平亮、同誌)はドイツの大戦後に於る國際的地位の向上は英佛關係の罅隙の擴大に乗ぜしものなりと「ソウイエット・ロシアの外交」(米田實、同誌)はロシアの歐亞諸國に於ける外交を検討してその外交は歐洲の方面では成功して居らないが亞細亞に於てはその勢力大いに膨脹せりとし「ベッサラビア問題」(堀口九萬一、同誌)は大戦後に於ても尙ほ露國と羅馬尼亞の間の關係の暗礁をなつて居るベッサラビアの問題に就いてその歴史的關係を述べ現在の争點を論じ、「モスールミイギリスの帝國主義」(中平亮、同誌)は豊富なる石油田を有せるモスールの地に對する英國の政策を論じ「近東及中東の石油外交」(有川治助、同誌)は將來の國防及び産業上に革命を齎すされる石油田の豊富なる爲に列強の經濟的帝國主義の抗争の中心となりし近東及び中東に於ける列國の政策を論ぜしもの「ムソリーニの外交」(中平亮、同誌)は一八八二

年に三國同盟に加入して以來の伊國の外交を述べ伊國が後獨逸より離反し遂に世界大戦には協商國側に味方するに至つたのは伊國の經濟的要求が指示する道を辿りしものであつてムソリーニの外交策も亦かゝる經濟的要求をそのまゝ逐うて進んで行つて居るものであるとし「フアシスト及びファシズム」(森口繁治、法學論叢)はフアシストの起源とその發展の經過及びその内容を述べしものである。その他「英國の總同盟罷業」(河田嗣郎、經濟論叢)は昨年五月四日を期して行はれた英國の總同盟罷業はその規模の大なる點に於て又總同盟罷業なるもの、意義の確定せる點に於て實に劃期的のものなりとし、その原因としては近時英國の採炭業が行詰りの状態にある且その組織が甚だ不統一であるを云ふ根本的事情によるものなりとし、その根本的解決法としては國有國營制が最も可なりとして居る。又英帝國の組織に大なる變化を齎すに至つた英帝國會議に關しては、「第三回英帝國會議」(高橋清三郎、外交時報)「英帝國會議の功罪」(同人、同誌)「英帝國會議の一觀察」(高木信成、同誌)「難關だらけ

の英帝國會議(稻原勝治)があり、「再燃した戰爭責任論」(柳澤慎之助、同誌)は世界大戰中及びその後所謂大戰責任論は頗る盛んに行はれたが最近再びこの問題が獨佛間に燃え上つて來たことを述べて居る。(大村)

考 古 學 界

昨年(一九〇九年)に於ける斯界の主要なる業績を先づ石器時代から概觀するに台灣九州方面では「台灣台中州水底寮の石器時代遺跡」(宮原敦、人類學雜誌)は概報に過ぎないが、土器は直線的紋様であつて頗る九州南端のものに類似し、石器特に錘石の加工に特殊なるものゝあることが注意される。「台灣の古代石造遺物に就て」(島居龍藏、民族)同島東海岸花蓮港附近の凝灰岩製の石造物を考證し所謂巨石文化の性質を有するものとして石器時代に屬するものであることを云ひ、「日向に於ける先住民の遺跡の概要」(河井田政喜、歴史地理)は其の題目の示す如く、「肥前國有喜貝塚發掘報告」(濱田耕作、島田貞彦、小牧實繁、人類學雜誌)に原始的石槨の發見と人骨に伴存する鐵鏃ありて前者は箱式石槨の先行的構造として、後者は貝塚構

成民族が當時既に鐵器を所有する民族との接觸を證明し本邦貝塚の古るさを知る時代的の一根據を與へるものとして注意を惹くものである。同地發見人骨測定(宮本博人、同誌)あつて貝層中のものが石槨中のものより却つて頭蓋骨等に日本人に近似するものであることを告げてゐる。「福岡城西大堀發見のアイヌ式土器片」(中山平次郎、考古學雜誌)には從來該式土器分布の痕跡の少かつた北九州に筑後三池郡二川貝塚、同浮羽郡の發見例と共に更に新例を提供さるゝもの、中國地方に入つて備後國沼隈郡高須村大田貝塚の發見は供存人骨六十六體を數へ(清野謙次、佐藤真穂、島田貞彦發掘)未だその詳報に接するものはないが此地が人骨伴存の遺跡として本州の最南に位することゝ、他方、津雲貝塚に近接してゐるに拘はらず土器の形式の著しい差が認められ少くも當代の終末に近いものであることに興味深いものがある。津雲貝塚發見の人骨測定(清野謙次、宮本博人、人類學雜誌)は數次發表されてゐるが更にこれを「津雲石器時代人民はアイヌ人なりや」「再び津雲貝塚石器時代のアイヌ人

に非らざる理由を論ず」(以上清野謙次、宮本博人、考古學雜誌)を提供して、人骨測定に基く見解を述べ本邦の石器時代人を以てアイヌ系なりとする先住民族論を否定し當代人は現代日本に住居する人種の土台をなすものであつて、これが進化し或は南北の隣接人種との混血によつて現代アイヌ人或は現代日本人をなすものであるとしてゐる。四國では「伊豫に於けるアイヌ系土器發見の二遺跡」(種口清之、同誌)として温泉郡久米村山田池、道後土居の段の二例を詳述したもの、「徳島市水道三谷瀧過池に於ける原始的獨木舟發見の顛末」(森敏介、歴史と地理)は過般、鳥居博士發見のそれを記述したもの、近畿附近の遺跡として「播磨國明石郡垂水村山田大歳山」(直良信夫)「河内國中河内郡日下貝塚」(島田貞彦、人類學雜誌)に繩紋式系統の土器發見があり、後者はさくに淡水産貝塚の構成なるによつて古代に於ける「河内平野の古地理」(小牧實繁、史林)を明かにし近畿附近の重要な遺跡を占めるものと云へる。「伊賀で發見された石棒と彌生式土器」(上田三平、考古學雜誌)、「大和發見の特殊石庖丁と石

錐用石鏃」(種口清之、人類學雜誌)の遺物の考證がある尙ほ「國府石器時代人々骨の人類學的研究」(清野謙次、宮本博人、同誌)の外、此地方の當代遺跡を稍々綜合的に見たるものに「近畿地方に於ける繩紋土器の研究」(直良信夫、考古學雜誌)、「有史以前の近江」(島田貞彦、歴史と地理)等がある。北陸では「越中石器時代民族遺跡遺物」(早川莊作)に概述され、東海道方面では「北三河の遺跡」(夏目一平、考古學雜誌)で天龍、矢作、豊川三上流地帯のものを述べ「伊豆に於ける彌生式民族の分布」(後藤肅堂、中央史壇)「靜岡市を中心とした先史原史時代遺跡」(靜岡縣史蹟報告第二冊)等でそれら紹介されるものがある。「武藏荏原郡調布村の遺跡」(森本六爾、榎本龜之助、谷木光之助、考古學雜誌)、「東京府下調布村千島久保貝塚所見」(大山柏、人類學雜誌)は同一遺跡の調査なるが後者の發掘に於て繩紋及び彌生式土器の層位的關係を判別するものゝあつたことは關東の遺跡に於ける兩者土器の移行を注意すべきものと云へる。「武藏國鶴見町二見台の遺跡」(八幡一郎、甲野勇、同誌)、「南多摩郡高ヶ坂石

器時代遺跡〔柴田常恵、史蹟名勝天然紀念物及東京府史蹟調査報告第四冊〕考古學上より觀たる秩父〔谷川盤雄中央史壇〕等があり、中にも高ヶ坂遺跡は敷石ある當代の住居址として次に述べる姥山貝塚のそれと對照して興趣あるものである。東京帝國大學人類學教室のなせる下總國東葛飾郡姥山貝塚の發掘調査は當代遺跡發掘事業で近時まれなる業績と云つてよい。而して十數例の住居址を貝層下に發見したことは此種遺跡の確證を與へることに於て最も重要視すべきものと云へる。東山道方面では「下野國藤岡町篠山貝塚」〔栃木縣史蹟調査報告第一輯〕の詳述があり、奥羽地方には未だ綜合的報告に接しないが同地方の遺物遺跡に立脚した奥羽史料調査部が東北帝國大學に新設せられ喜田貞吉博士が主としてこれに従事し既に二三の考證が試みられ「奥羽地方のアイヌ族の大陸交通は既に先秦時代にあるか」〔喜田貞吉、民族〕「奥羽北部の石器時代文化と古代支那文化」〔同人、同誌〕が提供されてゐる。前者は同地方發見の内反り石劍を以て支那古代の刀貨によつたものではないかといひ後者は同じく

出土の多い硬玉製原始勾玉乃至珠狀耳飾を以て或は支那古代の玉斧、玉璧に又た三脚狀土器の發見により同じく兩を象るものでなからうかといひ、奥羽地方が支那古代文化との最も早い交渉を有するものであるとする持論を強調したものである。北海道に入るに「室蘭市本輪西貝塚の鹿角製銛頭」〔長谷部言人、人類學雜誌〕がある。個々の遺物では「燕形銛頭」〔同人、同誌〕「注口土器の分布に就て」〔中谷治宇二郎、同誌〕「土偶に關する」〔二三の考察〕〔谷川盤雄、國學院雜誌〕があり「貝塚の地形學的考察」〔東木龍七、人類學雜誌〕は此種の研究として特に觀るべきもの、關東低地の地形發達よりその海岸線、貝塚の新舊を考證するものであつて、貝塚成生の綜合的見解として興味が深い。「貝塚の研究」〔直良信夫、歴史地理〕「日本石器時代に於ける二大文化圏」〔谷川盤雄、國學院雜誌〕等があつて後者は繩紋、彌生兩式土器分布の對立に基き種々考述をなし兩者土器手法を以て異種族の所産なりとしてゐる。當代の土器紋様に基いて「原始文様に關する一二の私見」〔杉山壽榮男、人類學雜誌〕「原始文様に就て」

(同人、同誌)「アイヌ紋様」(同人)等を求められる。次に金石並用時代として青銅遺物を對照するものに「播磨國佐用郡平松發見の銅劍」(島田、同誌)「歐洲に齎された銅鐸」(梅原末治、同誌)「丹波北桑田郡下弓削發見の銅鐸」(京都府史蹟報告第七冊)「周防國山口町茶臼山古墳發見の銅銚」(島田貞彦、歴史と地理)等に個々が擧げられて居り「銅鐸の化學成分に就て」(梅原末治、東洋史論叢)は十八例の化學分析に基き氏の認めて古式とする流水紋式のもの、含錫量が支那古銅器の性分と合致するものあるによつて恐らく其の質料の大部分は彼國から將來されたものによるであらうといつてゐるが新式とする含錫量の少い袈裟禪式に關しては充分なる解釋は將來に残されてゐる。

以上は吾が史前の遺物遺跡を對象とするものであつてこれを摘要するに大正初頭に偶發的發見のあつた河内國府發見の人骨が端をなし爾來十餘年、常代遺跡の研究は科學的に取扱はるゝに至つた。而して最も主要とする土器論は人骨の測定と相待つて着々その成果を與へ就中、

人骨測定による一部専門家は「アイヌ的要素の不可なるを説くに至つたことは最も注意すべきことであらう。此等が果して土器研究を如何なる點にまで合致するものであるか尙ほ殘された重要問題である。住居址の確證は特記すべき業績と考へる。金石並用時代の究明また特筆すべく、銅劍、銅銚の論究はほゞ其の解決を得たものに見えるが銅鐸に至つては尙ほ考證さるべきものがあらう。されど本邦の先史時代研究は年を逐ひ益々其の確實性を見るに至つてゐることは誰れしも首肯する所であらう。此の機運に際して當代研究の勃興に最も刺戟を與へたモールス氏を追悼(人類學雜誌)することは特に意義深いものゝあることを覺える。

次に原史時代を窺ふに、本邦考古學的遺物の對象として常に主要なる地位に立つものは古墳墓が其の多きを占めてゐる。されどもより組織的發掘に基くものでないからこれを前述した先史時代或は朝鮮のそれに比べると甚しい隔りがある。されば勢ひ過去に於て發掘された古墳乃至副葬遺物の個々を綜合して所謂「モノグラフ」とす

るの必然的であることがうなづかれる。而して近時續行されてゐる内務省及び各府縣の史蹟調査事業の遂行に共に主要なる遺物遺跡は逐次記載せられてゐるが今ま古墳から見るに近畿以西では「長門國大津郡東深川粉塚」(島田貞彦、歴史と地理)に墳丘狀の丘腹に穿たれた十數個の横穴古墳の出土遺物として銅製壺鐙等を説き「周防國富田町竹島御家老屋敷古墳」(同人、同誌)は一孤島に築造された古式古墳に存する銅鏃あるもの、「備中に於ける金釵發掘の古墳」(森本六爾、中央史壇)として都窪郡山手村にある前方部に一個、後圓部に二個の粗簡なる堅口式石室あるものから往古出土した金釵に就て廣く考述し、「出雲國簸川郡莊原村塚山古墳」(野津左馬之助、史蹟名勝紀念物、島田貞彦、歴史と地理)から發見した石棺内人肯伴有の木漆櫛の特殊な遺物に觸れるもの、「山城國乙訓郡大原野村發見の陶棺」(同人、同誌)はその埋置に石室あるもの、新例を提示し「大和にて發見せる海獸葡萄鏡」(上田三平、考古學雜誌)の紹介がある。近畿以東に入るに「美濃國稻葉郡佐波村六反畑古墳」(林魁一、同

誌)「武藏在原郡馬込村の一横穴」(森本六爾、同誌)「武藏國在原郡池上村桐ヶ谷の横穴」(谷木先之助、同誌)「武藏蒲田町附近に於ける沖積層地の原史時代遺跡」(谷川盤雄、歴史地理)等の報告があり、東山道方面には「上野國山ノ上古墳」(田澤金吾、史蹟精査報告第一冊)「同國愛宕塚、車塚、牛塚、琵琶塚、侍塚」(栃木縣史蹟報告第一輯)があつて、山ノ上古墳は横口式石室の附近にある山ノ上碑と關聯する考證を試み恐らく被葬者の爲に建碑せしものならんとの興味ある新例を提示してゐる。「八鈴鏡出土の古墳」(森本六爾、中央史壇)は同國新田郡九合村發見の此種多鈴鏡として唯一の遺跡を叙したものの、「金鏝山古墳の研究」(同人)にて信濃國下高井郡日野村の丘陵にある一圓墳の構造遺物を考述したもので特に此地石室の構築が粗簡なる屋根型を呈するによつて、これが近畿地方に發達する所謂「冢形石棺」の先行をなすものでなからうかとし遺物として武具多きを占め特に鋸身の考證がある。「前方後圓墳に關する一考察」(梅原末次、支那學論叢)「前方後圓墳の外形の起原に就て」(森本六爾、考古學雜誌)は

共に本邦古墳の獨自である該形式の發生に就いて考述を試みたるものであつて前者は支那周漢代の方圓二墳の形式が支那後漢代に當る時期に畿内を中心として短急の間に其の結合形式が築造されたものとし後者は該式古墳の前方に往々被葬さるゝ構築あるに基き圓墳の前に祭壇ある古墳を模倣してなされたものであらうとする。遺物を綜合するものに「漢式鏡(後藤守一)がある。本邦各地古墳發見の該鏡を網羅して其の出典と地名とを擧げ古墳研究に基調をなすものである。「奈良朝に於ける陵墓の問題(和田軍一、史學)は文獻に基く考證であるが當代の陵墓の縮少が必しも山陵尊崇の減少を意味するものではなく又次に盛行する山陵荷前の先驅が當代に認めらるゝことを説くもの、次に墓誌を對象とする古墳末期のものに「上代墓誌に關する一二の私考(森本六爾、考古學雜誌)」「文忌寸禰麻呂の墳墓(同人、中央史壇)等、特殊なる此種墳墓の性質を明らかにせんとするもの、陶器址では「奈良縣生駒郡の古代陶窯遺跡(上田三平、考古學雜誌)の和銅錢伴存のものは土器研究に基礎を與へるものと云

へる。歴史時代に入る各種遺物を對象として考證するものが近時頗る多きを占めるに至つたことは最も注目すべきことであらう。考古學的の遺物遺跡が石器、古墳墓に限定さるゝことなく歴史時代の文獻と相待つて其の考究の範圍を擴め合致的ならしめるものである。其の主要なるものは宮寺址(建築)、古瓦、經塚、碑石、石佛等であつて、これらに該當するものに宮址では「平城宮址調査報告(上田三平、史蹟精査報告第二冊)」「平城京の都市計畫(同人、歴史と地理)前者は築きの工事に際して明らかにされた大極殿歩廊側溝敷石、基壇、礎石等によつて平城宮の遺構を叙ぶるもの、寺址として主要なるもの、神泉苑」「山科本願寺及遺址(京都府史蹟報告第七冊)」「國分寺址(栃木縣史蹟報告)」「法隆寺五等塔に關する新發見(伊東忠次、史學雜誌)があつて、ここに最後のものは世上に喧傳さるゝことの多かつたものである。この空洞の成因に就て博士は慶長頃、須彌壇の修築に際して補修したものであることを共存する遺物によつて論述されてゐる。經塚關係に「今熊野龜塚の瓦經」「善峯寺の經塚」

(京都府史蹟報告) 石佛に「大谷石窟佛」(史蹟調査報告第一及栃木縣史蹟報告)があつて本邦石佛の分布として九州豊後地方に存在するものに對して見逃すことの出来ないものである。古瓦に「法隆寺出土古瓦の研究」(奈良縣史蹟報告第九回)は法隆寺防火工事水道敷設に際して發見された最も確實なる資料に基いて説述したものの「續家藏圖録」(天沼俊一)「巴紋の起原に就ての憶説」(同人、歴史と地理)「所謂劍巴紋の起原に就て」(岩井武俊、同誌)等古瓦に關する圖録や論考がある。建築として「法隆寺の建築様式」支那六朝の建築様式「濱田耕作、支那學論叢」に該寺の様式が高勾麗、新羅及び支那六朝から後漢のそれに密接なる關係があるとして兩者の文化的交渉を説及したものの「玉蟲翅飾考」(同人、東洋史論叢)は玉蟲厨子にある飾蟲を中心として、南朝鮮金冠塚發見遺物のそれを考證し尙ほ昆蟲學的研究に基いて朝鮮に存在せぬことから本邦よりの輸出飾蟲としたもの「奈良時代の文化圖」(石田茂作、考古學雜誌)として文献及遺址による當代寺院の分布を、制田、礎石、伽藍配置によつて、京畿、九

州、關東、中國の四密集を求め、外來文化との交渉を述べたものである。以上の外、栃木、熊本、京都、東京、兵庫、長野、靜岡、島根等の各府縣調査報告に登載さるゝもの、多くはこれを省略する。「造像銘記」(考古學界)に於いて在銘あるもの、凡てを蒐成されたことを特記したい。基督教關係では攝津三島郡、肥前南高來郡、岩代國郡山町のそれ々に墓碑の發見を告げて居り、足利、龍江院所在の木彫が蘭船エラスムス號の船首彫像なることが判明されたことも興味あることである。これに關して「龍江院の貨狄様」(村上直次郎、考古學雜誌及史學雜誌)「エラスムス貨狄」(新村出、藝文)等に詳述されてゐる。更らに吉利支丹史料集として「對外史料寶鑑第一輯」(永山時英)は彙きに刊行された「對外史料美術大觀」に相待つて其の姉妹編をなすものである。

以上は内地に於いて發生した考古學的事實の主要なもの、既に過ぎないが、更に朝鮮方面の斯界を見るに南北朝鮮に於ける古蹟調査事業の遂行は近時益々其の精密を加へ而かも每次組織的古蹟發掘が行はれた、北鮮

に於ける樂浪古墳、南鮮に於ける慶州古墳等がそれであつて、前者は直ちに支那漢代文化との交渉を後者は延いて本邦上代のそれと密接なる關聯に立つものであつて、換言すれば朝鮮半島の遺蹟遺物の考究は支那及び日本を連鎖せしめる鍵と云つてよい。今ま該方面を一瞥するに北鮮では曩きに東京帝國大學に依つて發掘され豊富なる漆器製作の遺物を出した樂浪の王肝墓古墳遺物の整理を告げ昨春同大學に於いて公開されたが其の概報として、「樂浪古墳發掘」(田澤金吾、史學雜誌)がある。漆盤、漆奩、漆坏、漆案、瑤瑁製匣等何れも木樫内に存在し、これらの器物に建武二十一年から永平十二年に至る後漢代の記銘あるもの多く、尙ほ五官掾王肝印、王肝印信と兩面に刻する木印の存在によつて被葬者の地位と其の實年代を確證せしむるものである。更らに此地發見の主要なる遺物に「樂浪出土の工藝品に就いて」(原田淑人、同誌)考述するものがある。樂浪遺跡が近時斯界の注目を集めるものは如上の發掘に直接の原因をなすものであるが茲に其の素因を築いた關野博士等の業績を特記せねばなら

ぬ。「樂浪郡時代の遺蹟」(古蹟調査特別報告第四冊)がそれであつて、其の圖版のみの刊行を見たのであるが第一號より第十號墳に互る遺物遺跡と當地方出土の主要なる遺物の埴、封泥、銅鐘、銅劍、瓦當、陶壺、鏡鑑を網羅されてゐる。此等の中で、第九號墳の出土遺物は從來樂浪古墳を代表するものであつて、就中、銅製遺物に於て出色とされてゐることは周知の事實であらう。「樂浪の畫像埴」(原田淑人、民族)は大同江面西井里附近の埴墓發見のものに日月、四神象を表はすものあつて恐らく方位に應じて配置されたものであらうと推し、而して此種の顛畫が高勾麗古墳のそのの先行をなすものだからうかとする。南鮮方面を見るに「南朝鮮に於ける漢代の遺跡」(大正十一年度古墳調査報告、梅原末治、藤田良策、小泉顯夫)があつて、永川琴湖面、慶州入室里の遺物遺跡、南鮮發見の銅銚銅劍、北部朝鮮出土の銅銚銅劍と其の遺跡とを詳叙し本邦及び支那と密接なる青銅文化の南鮮に於ける由來を明らかにするものである。南鮮に於ける重要な遺跡調査は慶州附近に於ける古墳墓發

掘調査事業である。大正十年、慶州路西里「金冠塚」の驚倒的發掘についで金鈴、金鞋兩墳の同様なる發掘があつたが昨年度に於いても又々瑞鳳塚の組織的發掘が行はれ「慶州の瑞鳳塚」(濱田耕作、大阪朝日新聞)「慶州瑞鳳塚の發掘」(小泉顯夫、史學雜誌)に其の概要が報ぜられてゐる。主要なる遺物は「金冠塚」其他の出土遺物に類するものであるが青銅製錐斗、金銅金具附漆塗角瓶、玻璃坏、漆匙、金冠等が數へられる。

更らに眼を支那方面に轉ずるに同國の考古學的調査に勃興的機運を助成せしめるものは、近時、甘肅省で發見された史前の彩色土器の研究に外ならぬ「支那史前彩色土器研究の一新資料」(梅原末次、人類學雜誌)は氏の滯歐所見にかゝる此種のを附加し一般の支那古代土器の研究に「支那の原始土器」「殷墟の白色土器」「漢式の黝色土器」(濱田耕作、民族)等が提供されてゐる。有竹齋藏古玉譜(同人)は、羅振玉氏舊藏(上野精一氏藏)の支那古代玉器の圖録に附するに同國石器時代以降玉器の如何なるものであるかを論考されたものであつて、考古圖、古

玉圖攷、ラウフェル「玉」等の支那及び西洋學者のそれに對比し本邦學者の手になるものにして注視さるべきものである。尙ほ個々の遺物に就て考述されたものもあるが茲に述ぶることを省略する。土俗關係として「極東民族」(鳥居龍藏)「人類學上より見たる西南支那」(同人)等は東亞に於ける本邦四周の民族關係を説くものであつて、前者は今尙ほ原始的狀態にあるチユクチ、コリヤーク、アレウト、ユカギール族の風俗、習慣、宗教等を明らかにし、後者は皆つて西南支那の人類學的研究として苗族の研究に寄與したものの、興味ある記述であつて本邦の上代究明に與へる土俗學、人類學的に貢獻の少くないものである。

之を要するに本邦の考古學界は石器時代の研究に益々確實なる地歩を占めるに共に他方、朝鮮に於ける古墳發掘調査事業は一は内地のそれを他は支那漢代文化の究明をうながし兩者を連結せしむるものにして今や原始時代研究の中心をなすもの云へる。而して支那に於ける史前史後遺跡研究の擡頭漸く濃密を加へるものがある。此

機に際し東亞考古學會の設立を遂げるに至つたことは、吾人の最も記憶すべきことであつて、斯界の形勢が今や東亞のそれに動かんミする機運を如實に物語るものであらう。〔島田〕

地 理 學 界

前々年初頭を以て劃期ミなし俄かに活氣を呈し來り前年三月に至つて更に緊張味を加へ來つた後を承け昨年の本邦地理學界は正に活氣ミ緊張其のものであつた。雜誌著書報文等に發表せられた研究卓説の甚だ多いのを見て本邦斯界の趨勢が今や前々年初頭を一期ミして益々向上の一路を辿りつゝあるを感ぜざるを得ない。茲に昨年の本邦地理學界を綜觀し此等數多の研究卓説中より殊に重要なものを收獲し得る事は斯學の爲甚だ欣快に堪へない。先づ自然地理の方面に於いて、地質構造地殼運動に關して「西南日本内帯に於ける第三紀以前の地殼變動」〔小澤儀明、地理學評論〕は古生代末世界全般に亘つた大地殼變動は實に中生代ミ古生代ミを劃する大改革であるが現在の日本島が初めて陸地ミなり海面上に露れたのは此の

大變動による、出現當時は恐らく島ミしてでなくアンガラ大陸の邊縁山脈ミして存在したものであらう、此の山脈が第三紀のアルプス褶曲山脈ミ略同形式のものに屬する事が秋吉臺の研究によつて確められた、此の大褶曲地層の上に不整合に横たはるのが三疊紀層である事より褶曲の時代が古生代末である事には疑ない、此の大褶臥褶曲は必ず中國一般に亘つての運動であつたもの、如く、藏目喜臺地、成羽川支流に於ても逆轉構造を見る、該褶曲山脈は其後表面より侵蝕が行はれ三疊紀中葉には低地ミ化し海浸は徐々に進んだ、三疊紀侏羅前紀は靜穩であつたが侏羅末期には又著しい地殼の變動が行はれ古生代層の北側ミ反對に南に推し被せた、此の構造は内帯一般に見られ變動帯は略中央線に平行して居る、之れ恐らく西南日本彎曲の初期を意味し此の變動に伴つて火成岩漿の活動があつたもの、如く丹波丹後より備中に亘る基成岩は恐らく之ミ略同時の突入であらう、此の變動後旺盛な火山活動の續いた事は硯石層群が證明する、内帯が斯る變動を受けて居る時外帯が海であつた事は外帯に發達す

る白堊紀層により證明せられ其の海浸の最も廣汎であつたのは上部白堊のセノニアン期に於てで和泉砂岩は當時の堆積である、和泉砂岩堆積後中央構造線成生せられ内帶山脈ミ外帶山脈の對立を見たが未だ瀬戸内海なごの陥没區域は存在しなかつた、西南日本が現在の形になるまでには第三紀から現今に亘る幾多の變化があつたのであるこなし「第三紀及其直後に於ける九州地史の概要」(矢部長克、同誌)は、筑豊三池兩炭田を支配する主要なる地質構造線は南北走向の斷層若しくは撓曲其の東縁をなし該地質構造線は對島の延長にも略相當し朝鮮半島東岸の主要なる地質構造線小藤教授の太白山斷層線系に一致する、而して現在見る如き夾炭層の地理的分布は要するに其の後の削剝作用之れに次ぐ地塊運動の影響によるもので殊に前者は極めて廣域に行はれたもの恐らく九州全土に亘り地表の高低著しく減却し中國筋と同じく略平坦化したもの、如く、三池炭田附近一體の地貌が示す土地の高低は平坦面形成後の地塊運動による事實である、現在阿蘇熔岩に充填せらるゝ地域も亦同時の地塊運動に

成り従て阿蘇及其北方諸火山の活動は該地塊運動に於いて或は之に引續き行はれたものこ考へられる、白杵八代線の南球磨紀伊山地は該線に沿ふ傾動により隆起し開析せられたもの、其の平坦面形成は日向海岸に發達する瑞穂期の海成層ミ同時期ミ思はれるから瑞穂期以後若しくは瑞穂後期であらう、第三紀以後の新地層は九州の基礎構造に關係せず單なる表層に過ぎない、南九州の帶狀構造地域は現今溪谷の開析進み山岳重疊するが、其の頂點は略一平坦面に歸着し、該平坦面は西北より南東に斜下する、日向海岸に發達する瑞穂統海成層の傾斜は一般に急なるに係らず表面地貌は北西の山地ミ同様開析せられた臺地の觀を呈し従つて瑞穂統海成層の堆積に次ぐに地層の皺曲あり、更らに現今の開析臺地地表の平坦面形成せられ、後飢肥より北方に向ふ小地溝宮崎佐土原附近の三角凹地が示す地塊運動を見、該地塊運動は球磨紀伊山地の傾動ミ同時であり、又恐らく霧島櫻島等大火山地域の示す陥没ミ同時であらう、九州北中南部の最近地殼變動史を比較するに相互の關係甚だ密接で瑞穂期後の經過

は要するに平坦面の形成其の後の地塊運動及び火山活動である、瑞穂海成層が日向海岸に限られ而して古第三紀層が臼杵八代線以南に缺けて居るのは元來南部九州に於いても中部に於けるが如く等しく古第三紀層の堆積があつたが該地層は堆積後瑞穂海成層の堆積前南部九州全表面より全く削剝せられたもの、即ち恐らく臼杵八代線に沿ひ古第三紀後其の以南ミ以北に於て著しい地理上の差異が存在したものであり、該差異は南九州地盤の隆起に基くものであらう、瑞穂海成層の分布が南九州の東南に限られるのは瑞穂海は九州の大部を被覆せず當時九州は北西對島を越え朝鮮半島に連り亞細亞大陸の一部をなした爲であらう、本邦新第三紀層の陸生哺乳動物中最古のものに美濃平牧層群中の數種があり明かに當時の日本が亞細亞大陸に連續して居た事を示すが瑞穂海成層の分布より推す時は其の連續は九州朝鮮間に求め得べく、恐らく半島狀をなした當時の日本は瑞穂海浸により縮少し其の終りに行はれた海の退却により再び増大したであらうが愈々大陸より決裂し島嶼化したのは實に敷島隆起時代

の初めにあつて上述最後の地塊運動の一結果に外ならぬこなし「江原道の鱗片構造」(山成不二麿、同誌)はウイリスは北支那の地層を擾亂せしめた地殼變動は珠羅末期の造山運動であるこなし小澤博士は中國に於ける珠羅末期のデツケン構造を報じ江原道には珠羅末期の鱗片構造が認められ又古期中世層には此の期の地殼變動により擾亂せられたものが多く此等の事實よりするに珠羅末期の造山運動は甚だ廣汎な區域に亘つたもので地質構造上地形學上特に重要視す可きものであるこなせるもの、山脈、生成に關して「生駒山脈生成論」(横山次郎、地球)は生駒附近の砂粘土層群は大體略今日と同様の分布を有する盆地に沈積した、其後既に存在した低い生駒山脈は地塊運動をなして今日の如き斷層山脈の形をこつた、生駒主脈の西崖は地形上斷層崖らしく斜めに北を切る星田の斷層崖は砂粘土層の曳つりで證明せられる、生駒山脈東面は緩傾斜で傾動地塊の形を示して居るが内部にはなほ小なる地塊運動があり就中後生駒山脈の細長い傾動地塊は著しく其生成は砂粘土層群沈積後である、生駒山は閃綠岩で

水蝕に對する抵抗力強く古くより相當の高さを有する圓山で砂粘土層群沈積前の基盤地形は高低が少く生駒山はモナドノツクの如くであつたを考へられる、奈良盆地は元來盆地であるが砂粘土沈積後も更に沈下して居る、春日山斷層崖は實在しない、即ち春日山斷層は海成第三紀層に利用して居るが斷層崖の原形は其後の浸蝕によつて形骸を止めない、砂粘土層群が洪積世より古いにしても其の上の礫層も同じく動いてゐる以上近畿地方斷層山脈の最後の發育は洪積後期を考へねばならぬ、此の最近の地塊運動による造山的の働きは緩撓による表面的の仕事と考へ得るをなせるもの、地震に關して「關東大地震を海岸の昇降運動」(田中館秀三、地學雜誌)は關東大地震に於いて地盤昇降漸運動の現象のあつたのは不動點を思はれる銚子及伊豆南部の間で南大島不動區域の北及東北である、土地隆起の著しい所では地塊の傾動を示した、而して該隆起地方は最近地史時代より歴史時代に至るまで屢々隆起した跡を止めてゐるが過去數十年來昇降漸運動をなし土地は低下しつゝあつた、之れ恐らく元祿大地震の際

隆起して以來の繼續復舊運動であらう、大震の際には土地急に隆起したが其頃又はその後數日にして少しく復舊した如くそれより一、二月位多少復舊運動行はれその後海岸は完常したものの、如く此事實より推すに相模灣底大規模の隆起沈降區域も過去數十年來何等かの漸運動をなしつゝあつて大震の際飛躍的運動をなしたものであらうをなし「京都府及兵庫縣震災地調査報文」(小倉勉、同誌)は大正十四年本地域に於ける地震の震源は津居山灣附近、被害の大であつたのは沖積地及び地質構造線上斷層線上であつた、該地震は津居山附近に於いて舊構造線に沿ひ發生した地盤の變動に起因し舊構造線附近に偉力を現はしたをなせるもの、火山に關して「十勝岳爆發の今昔」(田代修一、同誌)は大正十五年五月十勝岳爆發に於いては融雪又は降雨による多量の水分が熔岩の隆起を接觸し多量の水蒸氣を發生し其の壓力は爆發を誘起したが熔岩流を出した事實はない、然し或點まで熔岩の隆起があつた事は爆發により熔岩の一部が空中に飛ばされたので明かである、泥流に依る被害を大にしたのは積雪が主要原因であ

るこなし「十勝岳の爆裂ニ水害の原因」(渡瀬正三郎、同誌)は今回爆裂の原因は主として狹義に於ける火山力増進で其の導火線は融雪水である、即ち毎年の地下滲透水が火口内に達し熱せられ酸性を帯びて附近の岩石を分解し水の不透過層なる泥土を生じ火口内の噴氣力を遮ぎり爾來活動力漸次増進した、融雪の原因は主として高熱の泥流である、爆裂に際しては火山灰及火山彈を噴出したから單なる爆裂ではなく爆裂性噴火である、出水の原因は高熱の泥流が積雪を融かし之れに地下水及地表水を加へたのに依る、而して廣義の火山活動は漸次衰微に傾きつゝあるこなし、「十勝岳爆發概要」(佐藤戈止、同誌)は今回の爆發は硫黃岳西半を爆破し多量の泥流を流し灰を降らし新熔岩の火山彈を抛出した、熔岩は火口より溢出するに至らなかつたが火口附近まで上昇した事推測に難くなく泥流中に水量の多かつたのは融雪によるが又爆發に伴ひ熱水が噴出したのではないか、降灰は泥流々々の後まで繼續し新熔岩火山彈の抛出前に終止した、鬱積した瓦斯は山體を爆破したのみならず火山彈を抛出しそ

の岩質は從來十勝岳を中心とする火山活動により逆流した古期熔岩に比し鹽基性を示して居る、新爆裂火口の位置及噴氣孔の配列から考へ硫黃山を通り南東より北西に向ふ一弱線が存在し今回の爆發も該弱線に沿うて起つたもの、如く且活動の中心は漸次北西に移動する傾向があるこなし「十勝岳硫黃山噴火原因ニ現狀」(田中館秀三、同誌)は泥流の水は山體に滲み込んだ水、山上に存在した沼の水、降水、積雪時増加した河水である、新熔岩は爆發後時を経て噴出したもので其の噴出より見れば今回の活動は爆發性噴火である、火山力は近年追々増進し恐らく熔岩が地下深所より火口管に上昇し地下の温度は増進し山體に含まれた硫黃は熔融し熔融硫黃溜を形成し、尙山體上部の滲入水は熱水となつて居た、此の上昇熔岩の上方又は地下熔融硫黃溜のあつた中央火山の底に雪解け水が地下水道より又直接表面より滲入し其或部分は熱水となり之等の水は突然水蒸氣化し爆發を引起した、噴出物、抛出物、崩壞物は大雨、融雪水、河水と混じり泥流を生成したこなし、「十勝岳爆發の研究」(同人、

地理教育)は爆發力は非常に劇しかったので熔岩流をも形成せず又樽前式熔岩丘をも形成せず不規則な塊及び火山彈の抛出をなした、かゝる意味にて今回の噴火はボルカノ式のものであるが爆發が比較的劇しく山體の一部を爆破し新熔岩を抛出した點はボルカノ式と異なる、故に爆發性噴火であつて之れを十勝式噴火なる新標式に數ふべきであるとなせるもの、斷層地形に關して「斷層谷の性質並びに日本島一部の地形學的斷層構造」(辻村太郎、地理學評論)は本州四國九州を通じて島弧に對して直角の斷層線は西南日本内帯に於いて近畿に限られ東北日本に於てはフォッサ・マグナ附近にのみ發達する、西南日本に於いて中央線は地形的斷層構造の點からも著しい境界線を形成し内帯に於ける斷層網は密集するのに反し外帯に於いては發達が悪い、前者に於て最も顯著な斷層線は東北に近い方向を有し中國に於いて瀬戸内沿岸に發達し、後者に於いても斷層の發達は其内側に於てであり其の斷層系は東北乃至南北の方向を有し斷層線は互に雁行し且日本海に對して斜めに走るをなし「複斷層崖の發達」(同

人、地質學雜誌)は東北及西南日本の境界線をなす糸魚川靜岡地溝線附近は日本に於ける地盤垂直移動の最大な部分で本州に於ける最高の斷層崖を形成し且之れに沿ひ狹長な地溝盆地と西部に飛驒及赤石山脈の最高隆起帶あり兩斷層山脈が侵蝕區域なるに對して地溝部は堆積區域をなす、現地形の大部分は地盤運動により決定せられ侵蝕による變形は山谷の細部形状を作るに過ぎぬ、此の斷層崖下の一部に新第三紀層の存在する所より複斷層崖の疑を起し得るが之れも斷層崖と見做して可い、をなし、「飛驒山脈の北端に於ける斷層崖の二形式」(同人、地理學評論)は飛驒山脈の北部山麓なる富山平野の東北端には比較的近代に形成せられた階段斷層崖が存在する、上部のものは舊期のもので花崗岩石英粗面岩等の地域を截斷し下段の斷層崖は第三紀層の上部に堆積した砂礫層をも截斷して居るをなし、段丘地形に關して「北上縦谷中流部に就て」(渡邊萬次郎、地球)は北上川中流部の縦谷底を充すものは仙臺附近解析臺地の續きと思へる段丘地で北上川沖積原は其の一部を浸蝕して造られたに過ぎ

ぬ、臺地面は恐らく洪積期中或時期の基準面が上昇し削磨と共に撓曲及斷層による傾斜運動を受けたもので就中一の關附近に於ける東西上り中下りの撓曲衣川以北に於ける南上り北下りの傾斜等が著しく、衣川以北の沈降部には其の西側の奥羽山系より射出した沖積扇狀地が發達して居る、北上沖積原が衣川以北に特によく發達するのは傾斜運動によりその上流が下つた爲であり一の關以南に於いて其の連續を見ないのはその東方狐禪寺附近より先行谷として硬い中生層の礫岩中に入るに加へて撓曲運動に基く上昇區域を流るゝ爲谷の成熟する餘裕のない結果である。こなし「河川の觀察に就いて」田上政敏、地理教育）は北海道の段丘中最高最古の河成段丘は地盤の變化により形成せられた構造段丘下段數個の段丘は其の後の洪水氾濫により形成せられた氣候段丘で後者は眞の洪積期より後舊沖積期以後歴史時代に互り形成せられたものである、構造段丘に屬する最高の段丘が各河川の流路に沿ひ明瞭に發達するに拘らず氣候段丘に屬する低い段丘の發達が不規則であるのは其の成因の然らしめる所

である、石狩海岸が最近五乃至十米上昇したのは石器時代住民の北海道に移住した後であると思はれる。こなし、「南洋諸島の海蝕段丘」(多田文男、地理學評論)はサイパン島は數段の段丘狀をなす島嶼であつて段丘の或るものは間歇的隆起中の休息時に作られたもの、あるものは徐々になる隆起中に作られたものであらう、東海岸が斷崖をなし急に深海に入るに反し西海岸には廣い堆積地があり其の内に堆積珊瑚礁が發達しチニアンと共に傾斜運動を受けた事を示す、ヤップ島はサイパン島と趣を異にし片岩と安山岩より成り隆起珊瑚礁を有しないが之も亦二回の隆起を行へる島嶼であつて少なくとも下の段丘は海蝕臺地である、之が最後の緩かな沈降によつて溺れ周邊に幅廣い礁平原が形成せられた、三島に特異な點は珊瑚礁海にあり乍ら數段の隆起海蝕臺地を有する事である。こなし「峽谷に關して」大崩壞峽谷に就いて(鈴木醇、同誌)は地形上或は地質上より吉野川横谷たる大崩壞峽谷は先行性流路であつて斷層谷或は斷層線谷でない、峽谷に沿ふ段丘の存在は隆起作用中幾度か河の回春した事を示

す、但此の段丘は中央構造線北部に發達する和泉砂岩山脚部の段丘には關係無きものゝ如くであるをなせるもの、海岸に關して「地形ミ具塚分布より見たる關東低地の舊海岸線」(東本龍七、同誌)は東京灣周邊舊海岸線は

比較的現海岸線に近接し唯丘陵内の溪谷に五乃至十軒内外侵入する細長い入江によつて單調を破る、中央低地帶の溪谷は東京灣に連續する大内灣を形成し古利根川荒川兩溪谷は其主幹をなし大宮岩槻加須丘陵の諸溪谷其の支灣をなす、鹿島灘南部に開口し東北丘陵群の間に多くの分岐を以て侵入する内灣は主な分岐の灣頭が六、外に手賀印旛の支灣がある、鹿島丘陵北方の淵沼も内灣である、九十九里灣方面では舊海岸線の主要部は下總丘陵の崖下にあり北東部の八日市場附近に稍著しい入江がある、此海岸は鹿島灘方面と等しく一大凹灣を形成し其形狀は兩者共に現在の海岸線に類似し唯舊海岸線は急崖の下にあり現海岸線は急崖下に發達する砂濱に畫かれるをなせるもの、海洋關係のものとして「楊子江口の潮汐及潮流」(小倉伸吉、地學雜誌)は海に近い所では潮流の働きは江

水の恒流より遙かに大であるが其れより上流では恒流が潮流よりも大であり江口の淺水では江底の摩擦作用が大であるをなせるもの、以上の如きは何れも自然地理學と直接の關係比較的大なるものゝ中最も見るべきものである。「小牧」

人文地理學の方面に於ては昨年の業績は甚だ多く、就中聚落及都市に關する研究報告の類が群を抜いた、今序を追うて概説すれば第一に理論の方面では「科學としての地理學」(小川琢治、地球)は最近の地文人文兩方面の進歩を明にしグワローの地理的諸科學研究法に學ぶべき所がある、特に人文地理の研究には土地と人類の關係を集合的敘述法によつて明にせねばならぬと説き「フランスに於ける地理學の研究に就て」(リュエラン、地理學評論)は佛國に於ける近世地理學の發達と其研究法を敘述し、「人文地理學の位置」(大内武次、人文地理)も亦斯學の歴史的發達をのべてあり「地理學方法論史の一斷片」(小野鐵二、商學論叢)も亦地理學は學であるか、その職能は何かといふ問題を提唱して其方法論としての歴史を

綜ね、アリストテレス以後にワレニウスの一般地理なるものが斯學に於て占めた位置を明にし「地理學的考察の一方法」(田中啓爾、地理教育)はドットマップによる地理的地域なるものを説き「ブアロー氏の歴史地理學論」(小牧實繁、歴史と地理)は歴史地理學なるもの、職能を明にしてブアロー氏の所説を批判し「經濟地理學の研究」(小野鐵二、地理教育)は經濟地理學研究の指針を示し「地人相關の理法的研究法」(内田寛一、同誌)は地人相關の現象をいかに見るべきかを明にしたものであり「土地に及ぼす人類の影響」(小川琢治、地球)は同じく地人相關の理法をのべて、人類がいかに地圖を變化したかを論じ、「人種争鬪の事實と地政學的考察」(飯本信之、地理學評論)は人種平等の原則から現在の世界に於ける移民排斥を論じ「地理學より見たる行政區劃に就て」(麥谷龍次郎、同誌)は主として我國の行政區と地理區とは混同すべからざるものであると云き「日本の地形區に就て」(下村彦一、同誌)は同じく日本の自然地理區を設定せんとした試みである。

朝鮮地名考説(中村新太郎、地球)は引續いて本年度に完結したが、何分昨年度からの讀物であつたので學界を刺戟したと見え、本年度には地名に關する研究が簇出した、第一に「地名考説」(柳田國男、民族)は地名採集の必要をのべ、日本の地名は今日に於ては一貫した法則により全國を比較して研究するこゝの出來る準備は具つてきたと斷じ「地名の起源」(山崎直方、地理學評論)は主として新大陸の地名の典據起源を明にして地名の附け方を記し「人文地理學の地名學的 연구に就て」(小川琢治、地球)は地名研究を支那西域の方面に及ぼし犂軒をリキアと斷じてある、「朝鮮平安北道南市地方の部落名」(向山武男、同誌)の如きはかうした潮流の産んだ一斷片であらう。人口又は人類地理學の方面に於ては「人口分布圖について」(麥谷龍次郎、地理學評論)「人口地理學に就て」(同人、同誌)「統計地圖に於ける階級區分に就て」(同人、同誌)はいづれも關聯した論文で人口分布圖の描出法を明にし「人類學上より見たる日本民族」(松村暲、人類學雜誌)は日本人の生體的計測の研究結果から日本人はアイヌ又

は朝鮮人とは違つて、東方亞細亞方面に強いアツフィニ
テイをもつ民族であるに斷じ「我南洋の人種」(松村瞭、
地理學評論)はチャモロ、カナカの大民族の異同をの
べて、我日本人との類似せる點を明にし「我領土内に住
する種族と其地理的分布」(宮内悅藏、人類學雜誌)はア
イヌ、朝鮮、臺灣の多くの民族の分布と其特性をしるし
「アイヌ民族」(八田三郎、地理教育)はアイヌの人口減少
を論じてある。つぎに太平洋に關する論文では「太平洋
研究の意義」(坪井九馬三、民族)は日本語の中にマラヨポ
リネシア系の言語がある、我國が支那文化を受け入れた
以前に太平洋民族との關係があるに記し「太平洋論」(藤
田元春、歴史と地理)は大圏航路から見て度外され易い太
平洋群島の中に、かの扶桑といつた古國があるのではな
いかと説き「太平洋地域の探検と開發」(小川琢治、地球)
は太平洋上に顔を出した三大殖民帝國の歴史と其發展と
を觀察してある「ドイツの太平洋探究」(山崎直方、地理學
評論)はメテオル號の業績をしるし、メルツ教授の訃を弔
したもので「アメリカ發見前後の地球儀とジバング」(石

橋五郎、史林)はジバングの正しき位置が地圖に記され
たのは一五五七ガルバノの報告によつてオルテリウスの
圖に現はれたと論じてある。次に支那の人文地理に關し
て「南洋に於ける支那人の發展」(後藤朝太郎、地理教育)
は華僑の奮闘的成功をのべ「上海を中心とする交通區域
について」(田中薫、地理學評論)は上海の交通を論述し
「支那に於ける人口分布」(中野竹四郎、地理教育)は米國
ボックスビーの論に基いての研究であり「支那大運河の
地理學的考察」(藤田元春、史林)は大運河の水源と水準等
について詳述し「黃河平原と其棉花」(同人、地理教材研
究)は河道變遷の跡である黃土沖積地と其農業的價值
を明にし多くのこうした論述の間に立つて「人種學上よ
り見た西南支那」(鳥居龍藏)のごときは苗族研究の旅行
報告として大に注目すべきものであり「西湖より包頭ま
で」(藤田元春)は同様に北支那及中央支那の人文地理を
紹介した旅行報告書である。

聚落の研究に關しては「人文地理學より見たる日本の
村落」(小川琢治、地球)は莊宅式村落、垣内式村落、氏神

寺院との關係等、我國村落の發達を概説し「先史聚落地理」(小牧實繁、同誌)は地史時代の聚落を對象として學的研究の必要を論じ「聚落の生態に就て」(西龜正夫、同誌)は聚落の發生、成長、衰滅、活動の問題を論じ「聚落の研究」(西田與四郎、地理教育)は其研究法を奈良盆地について記し「盆地聚落の機構に就て」(佐々木彦一郎、地理學評論)は鹿角盆地について研究の着眼點を明にし「民家の話」(今和次郎、地方)は日本民家の面白い觀察であり「屋根概説」(藤田元春、地球)は同じく民家の屋根の種別を細説して都鄙の別に及び「歐米の農村」(横尾惣三郎、地方)は英國、丁抹、獨逸、米國の農村狀況を報告し「アルプスの聚落」(田中阿歌麿、地球)はローヌ川畔の聚落と地形との關係をきき「武藏野臺地に於ける水と聚落との關係」(蘆田伊人、同誌)は主として玉川と其水道が臺地の聚落をつくつた經路を明にし「波斯の聚落及住宅」(金原信泰、同誌)は同じく地形と聚落との關係を論じ、「鈴鹿峠の聚落」(西田與四郎、地理學評論)は交通路の衰微に伴ふ驛村の荒廢を論じ「鹿角盆地の經濟的地理構成」

(佐々木彦一郎、同誌)は生産地域と人口分布との關係を明にし「三角洲上の地理」(小牧實繁、地球)は近江野洲川及日野川の三角洲上の人文現象を詳述し「近江商人の起源についての地理的考察」(田中秀作、地理教育)は近江の自然地理がこの商人に影響したことのべてある、猶この種の論文には「藝豫叢島の聚落に就て」(西龜正夫、地理教材研究)「庄内の砂丘」(小牧實繁、地球)「伊豆諸島の聚落」(辻村太郎、同誌)「男鹿半島に於ける二つの港町の特徴」(小田内通敏、同誌)「季節と共に興廢する能登舩倉島の漁村」(石井逸太郎、同誌)「奈良盆地の聚落」(西田與四郎、同誌)「作州津山藩の村落移轉策」(黒正巖、同誌)「マリョルカの人文地理」(田中阿歌麿、地理教育)「樺太アイヌ」(西鶴定嘉、地理教材研究)「弓ヶ濱砂嘴の地學的瞥見」(下間忠夫、地球)「朝鮮の火田民」(小田内通敏、人文地理)「小笠原群島の研究」(今和次郎、同誌)「大ロシア人の村の形」(田口稔、同誌)「北國の冬と農業」(奈良瓊之助、同誌)等がある、何れも見逃してはならぬ研究である。つきに都市の研究では「人文地理學上より見たる日本の都市」

(小川琢治、地球)は我國の都市汎論であり「平城京の都市計劃」(上田三平、歴史ミ地理)は古い都の計劃を明にし「帝都從來の町界、町名及地番に就て」(富樫建造、都市問題)は東京市の町名番地を論じ「澁谷町地番整理」(富樫建造、同誌)は澁谷の地番をいかに整理するかを論じ「最近五年間全國各都市人口の變化」(猪間驥一、同誌)は大正九年と十四年の人口の變化をしるし「都市の歴史」(武藤長藏、商業ミ經濟)は都市研究資料を集め「都市の發達ミ人口都市集中の諸相」(長屋敏郎、都市問題)は都市の膨大をこき「大都市ミ郊外町」(今井登喜志、同誌)は世界の大都市が發達するや、多く西の方に廣がるこいふこの地理的理由をのべ、「京都市内に殘存せる古代の聚落」(藤田元春、地球)は京都市内にある古い草葺妻入の町をしるし「歐米都市の交通整理」(三浦周行、大大阪)は歐米都市の交通を論じ「統計より見たる東京市の交通」(道家齋一郎、都市問題)は東京市の人の交通測定の結果をのべ「都市交通機關として」の電車ミ自動車(金谷重藏、同誌)は路面電車の重要度を明にし「都市に就て」(西田與四郎、

地理教材研究)は港市内陸都市の發達をオルブリヒトによりて記し「都市の研究」(同人、地理教育)はポー流域の都市を報告し「交通の障害に就て」(西龜正夫、地球)は交通に對する地理的障害物の一般論である、其他我國の都市については「名古屋市」(岡田鎮太、地理教材研究)「靜岡市」(山田覺藏、同誌)「京都市」(城野龜吉、同誌)「明石市」(伊藤修三、同誌)「鹿児島港」(須重喜一郎、同誌)「高松市」(石田久、同誌)「宇治山田市」(杉原評、同誌)「新潟市」(川口丈夫、同誌)等の地方研究が盛んであつた、この際、英國に於ける住宅政策」(河合榮次郎、都市問題)の如きは住宅の地制の上から見逃すべからざる論文である。

轉じて經濟地理の方面では、「世界に於ける鐵の分布」(渡邊萬次郎、地理教育)は鐵の分布を「石油地質學概要」(大村一藏、地球)は同じく世界の石油産地を詳述し「佛蘭西に於ける石油問題」(高橋純一、地理學評論)はベツシエルブロン油田其他の成績をのべ「熱帶農業について」(西龜正夫、地球)は熱帶の農業の特色をしるし「棉作よ

り見たるトルキスタンニ南滿洲〔山下肇、滿蒙〕滿洲の水田ニ朝鮮人、吳宗燮、朝鮮〕は何れも滿洲の農作に關する所説であり「北鮮産の木炭〔板垣只二、同誌〕」「更新せる産米増殖計劃〔安達房次郎、朝鮮〕は共に我國で不足するもの、補供を明にし」「地理的に考察した本邦水力發電所の分布〔原田準平、地理學評論〕は氣候、地形ニ密接に關係するを明にし「朝鮮に於ける發電水力〔高谷武郎、朝鮮〕は最近調査の水力發電地點の統計的報告である「諏訪製糸業發達の地理學的意義〔三澤勝衛、地理學評論〕は單に水質のみでなく、其由來の古いこゝが述べてある、通商公報、滿鐵調査時報の中に多くの經濟地理や、外國事情の所説が甚だ多いけれども今は一々之を掲ぐるの繁を省く、最後に「東南印度諸國の研究〔高桑駒吉〕が西域記のこの部分の史的考證といふ面倒なこゝに成功したこゝこゝ、及「西洋又南洋〔山崎直方〕といふ誠に流暢な地理の大家の旅行記が出版されて、いづれも洛陽の紙價を高めたこゝこゝは實に昨年の斯學界に於て欣賞すべきこゝこゝであつた。〔藤田〕